

山形県埋蔵文化財調査報告書第38集

下野遺跡

発掘調査報告書

1981

山形県教育委員会

しも の
下 野 遺 跡

発掘調査報告書

昭和 56 年 3 月

山形県教育委員会

序

本報告書は、昭和55年度に実施した、県営ほ場整備事業・井の下地区にかかる下野遺跡の調査結果をまとめたものであります。

発掘調査では、複式炉をもつ縄文時代の住居跡をはじめ、多くの土器・石器・炭化クリなどの自然遺物が発掘され、先人の生活や自然とのかかわりをたどる貴重な手がかりを得ることができました。久遠のかなたで、厳しい自然と融和一体となる先人の心豊かな、たくましい生活ぶりがしのばれる所であります。

近年、埋蔵文化財と農林事業とのかかわりは、増加の傾向にあります。本県の産業基盤である農林事業は、県民の生産基盤の整備や福祉の向上を目的とし、豊かな県土を目指して銳意進められておる所であります。一方、同事業は、幾千年の間土中に埋もれ続けて来た埋蔵文化財と直接的なかかわりを持つ事となり、その間には数多くの困難な問題が生じております。

県教育委員会におきましては、生活文化の向上、地域環境の整備等、同じ立場から、これらの間の調整をはかり、今後とも埋蔵文化財の保護のため努力を続けてまいる所存であります。

最後ではありますが、本調査にご協力をいただいた小国町教育委員会並びに関係各位に感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財に対するおおかたの理解の一助となれば幸いと存じます。

昭和56年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹 正治

例　言

1 本報告書は、山形県教育委員会が昭和55年度に実施した、県営ほ場整備事業井の下地区に係る下野遺跡の発掘調査報告書である。調査期間は、昭和55年6月30日から同年8月30日までの実質41日間である。

2 調査にあたっては、小国町教育委員会・置賜北部土地改良事務所・井の下土地改良区などの関係諸機関の協力を得た。記して感謝申し上げる。

3 調査体制は下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 佐々木洋治（主任調査員） 阿部明彦（現場主任） 佐藤庄一（調査員）

　　渋谷孝雄（調査員） [山形県教育庁文化課]

事務局 事務局長 浜田 清明 [山形県教育庁文化課課長]

　　事務局長補佐 荻野 和夫 [山形県教育庁文化課課長補佐]

　　事務局員 設楽周一郎 田内糸子 布施厚子 [山形県教育庁文化課]

4 挿図縮尺は、遺構の住居跡については60分の1、炉跡部分・土壤・集石遺構については40分の1、埋甕跡については20分の1を各基本とした。さらに各挿図それぞれにスケールを示した。土器の実測図は、4分の1、拓影図は3分の1とした。石器の実測は、打製石器を2分の1、磨製石器を3分の1、大形の石棒・石皿・凹石・磨石等を6分の1とし、それぞれにスケールを示した。

5 挿図・本文で用いた記号は、S T—住居跡、S K—土壤、S M—集石遺構、E L—炉跡、E U—埋甕跡、E D—周溝、P—柱穴、G—グリッド、F—遺構覆土、である。

遺物については、R P—土器・土製品、R Q—石器・石製品を示す。

6 本報告書の作成は、阿部明彦・名和達朗が担当し、それぞれ執筆した。全体については、佐々木洋治が総括し、編集については名和達朗があたった。

挿図・図版の作成にあたっては、太田八重子・津留房子・黒金佳子・高橋貴恵子・佐藤陽子・池田洋子・鏡 克子・吉田史子・松沢美保子・奥山厚子・山口由紀子がこれを補助した。なお、調査期間中に、秦 昭繁氏の協力を得た。記して感謝申し上げる。

目 次

I 調査の経過	1	土壤・集石	20
1 調査に至る経過	1	埋甕跡	22
2 調査の経過	1	2 遺 物	24
II 遺跡の位置と環境	2	土 器	24
1 遺跡の立地	2	石 器	39
2 周辺の遺跡	2	V まとめ	44
III 遺跡の概観	3		
1 遺跡の層序	3		
2 遺構と遺物の分布	4		
IV 遺構と遺物	6		
1 遺 構	6		
住居跡	6		
各住居跡炉	18		

挿図目次

第1図 位置図	1	第13図 8 a・8 b号住居跡	16
第2図 土層模式図	3	第14図 9 a・9 b号住居跡	17
第3図 下野遺跡全体図	3	第15図 各住居跡炉	19
第4図 遺構配置図(南区)	4	第16図 土壇・集石遺構	21
第5図 遺構配置図(西区)	5	第17図 埋甕跡	23
第6図 1 a・1 b号住居跡	7	第1図 土器拓影図(1)	25
第7図 2号住居跡	9	第19図 土器拓影図(2)	27
第8図 3号住居跡	10	第20図 土器拓影図(3)	29
第9図 4 a・4 b号住居跡	11	第21図 土器拓影図(4)	31
第10図 5号住居跡	13	第22図 土器拓影図(5)	32
第11図 6号住居跡	14	第23図 土器拓影図(6)	33
第12図 7 a・7 b号住居跡	15	第24図 土器拓影図(7)	34

第25図 土器拓影図(8)・土器実測図(1)…35	第28図 石器実測図(1)……………41
第26図 土器実測図(2)……………37	第29図 石器実測図(2)……………42
第27図 土器実測図(3)……………38	第30図 石器実測図(3)……………43

図版目次

図版1 遺跡遠景・発掘風景	図版9 土壙・集石造構
図版2 ST1a・1b	図版10 埋甃跡(1)
図版3 ST2(1)	図版11 埋甃跡(2)・石棒出土状況
図版4 ST2(2)	図版12 1~3類土器・3~6類直器
図版5 ST4a・4b・5	図版13 完形土器(1)
図版6 ST6全景	図版14 完形土器(2)・石棒
図版7 ST6	図版15 石器(1) 石器(2)
図版8 ST8a・8b・9a・9b	図版16 石器(3) 石器(4)
付表1 完形土器分類表……………36	

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

小国町には数多くの遺跡があり、「山形県遺跡地図」(昭和53年・山形県教育委員会)には67ヶ所の旧石器時代～歴史時代の遺跡が明記されている。下野遺跡は、昭和38年に刊行された「山形県遺跡地名表」に縄文時代の遺跡として登録され、昭和35年から実施された山形県自然環境学術調査会による「朝日連峰」の調査でも確認と紹介が行われた。また、^{註-1}下野遺跡の周辺には、団子山・谷地・才頭等の縄文時代遺跡が点々と分布している。

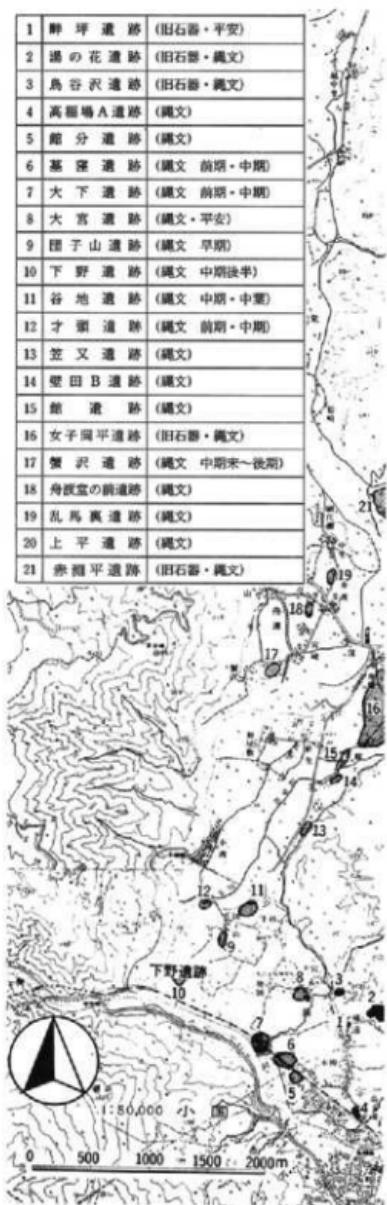
これら、遺跡を含む一帯の地域が、昭和54年度から井の下地区として県営圃場整備事業の実施予定地区となり、昭和53年秋以来、山形県教育庁文化課が事前の確認調査を行った結果、縄文時代の集落跡であることが推定された。これにもとづき、県教育委員会では、県農林部、小国町教育委員会、置賜北部土地改良事務所、井の下地区土地改良区等関係機関と協議を行い、事前に緊急発掘調査を行うことになったものである。

調査は、圃場整備の計画地域にそって、遺跡の西半部を主体として行い、昭和55年6月30日から同年8月30日まで実施した。なお、下野遺跡に隣接する団子山遺跡については、小国町教育委員会が主体となって、下野遺跡と同時に緊急発掘調査を実施している。また、昭和54年度には、谷地遺跡(縄文中期中葉)について県教育委員会が主体となり緊急発掘調査を実施し、竪穴式住居17棟、土壙40基、配石遺構60基等を検出した。

2 調査の経過

発掘調査では、遺跡範囲・調査対象地区を考慮して、遺跡の立地する台地全体をカバーするグリッドを設定した。グリッドは、磁北を基準として南北にY軸、東西にX軸をとり、2m単位でグリッド番号を付している。次に、遺構・遺物の分布状況を確認するため、グリッドに沿った2×10mのトレーナーを南北に10m間隔で入れ、南東部にも東西方向のトレーナーを4本入れた。その他、西半部、南西部では適宜2mグリッドを入れて土層・遺構・遺物の分布について確認を行った。その結果、調査区の西半部および中央部の北寄りに遺構・遺物の密集地が認められ、比較的遺構遺存の良好と思われた西半部を中心に精査区を設けた。精査区は、10×10mを単位として設定し、遺構の広がり等で随時拡張している。各精査区は、それぞれ便宜的に8~15-36~47G(グリッド)を西区、15~21-31~35Gを南区とした。精査の結果、西区ではほぼ全面に遺構が発見され、重複する住居跡を中心に、土壙・集石遺構等多数が検出された。南区では、19~20-33~34Gを中心として9基の埋甕跡を検出している。なお、調査期間中の7月25日に、県民参加による発掘調査を実施し、一般・小中学生など約100名の参加を得た。

1	群 岩 遺 跡	(旧石器・平安)
2	湯 の 山 遺 跡	(旧石器・縄文)
3	鳥 谷 泉 遺 跡	(旧石器・縄文)
4	高福場 A 遺 跡	(縄文)
5	館 分 遺 跡	(縄文)
6	基 座 遺 跡	(縄文 前期・中期)
7	大 下 遺 跡	(縄文 前期・中期)
8	大 宮 遺 跡	(縄文・平成)
9	团 子 山 遺 跡	(縄文 早期)
10	下 野 遺 跡	(縄文 中期後半)
11	谷 地 遺 跡	(縄文 中期・中葉)
12	才 头 遺 跡	(縄文 前期・中期)
13	笠 又 遺 跡	(縄文)
14	壁 田 B 遺 跡	(縄文)
15	難 渚 遺 跡	(縄文)
16	女子岡平遺跡	(旧石器・縄文)
17	蟹 沢 遺 跡	(縄文 中期末～後期)
18	舟 舫 室 の 遺 跡	(縄文)
19	乱 馬 真 遺 跡	(縄文)
20	上 平 遺 跡	(縄文)
21	赤 塚 平 遺 跡	(旧石器・縄文)



第1図 位置図

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

小国盆地は、山形県の西南部、新潟県に接する山間の小盆地である。飯豊・朝日の両山地にはさまれて南北に開けた盆地中央部の谷底平野は、北方の朝日岳から南流する荒川と、飯豊山から発して西流する横川によって形成された5つの地形面を持つ。^{註-2}高位段丘面から順次、①平林面、②横道面、(以上洪積段丘)③小国面、④八木沢面、⑤沖積低地面、(以上沖積段丘)となる。平林面(洪積中位段丘)には、東山遺跡・平林遺跡があり、横道面(洪積低位段丘)には、横道(畦坪)遺跡・鳥谷沢遺跡・岩井沢遺跡等の旧石器時代の遺跡がある。下野遺跡は、荒川と横川の合流する赤芝から東へ400m、荒川左岸100mに位置し、標高131~132mを計る。遺跡は、③の沖積上位面の西縁に立地している。地目は、畑・杉林で、台地の下に二ヶ所の湧水が認められる。

(第3図)

2 周辺の遺跡(第1図)

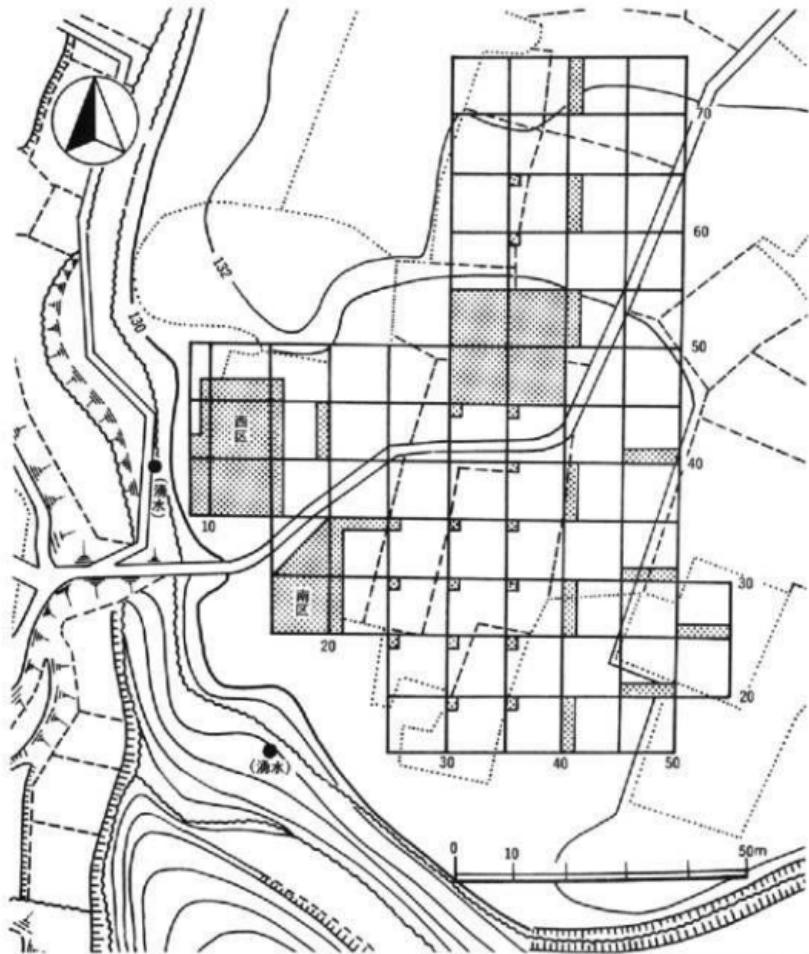
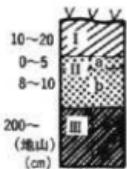
下野遺跡の周辺には、团子山・谷地・才頭遺跡等21の遺跡がある。縄文時代の遺跡では、今まで、谷地・蟹沢・团子山遺跡が調査され、谷地遺跡では、中期中葉の遺構・遺物が検出された。土器は、大木7b~8b式土器の他、馬高式系の土器がある。蟹沢遺跡では、中期後葉~後期初頭の遺構・遺物が検出され、複式炉を持つ住居跡等がある。土器では、大木式系土器の他、新潟県域を中心とする三十稻場式土器が多く出土している。

第2図 土層模式図

III 遺跡の概観

1 遺跡の層序

遺跡の基本層序は、3層にわかれるが、II層の上面に漸移層を認める。全体では、耕作や擾乱のため不均等であり、特に南東の調査区では根菜類栽培による深耕から、一次的な層序の遺存は断片的であった。以下、



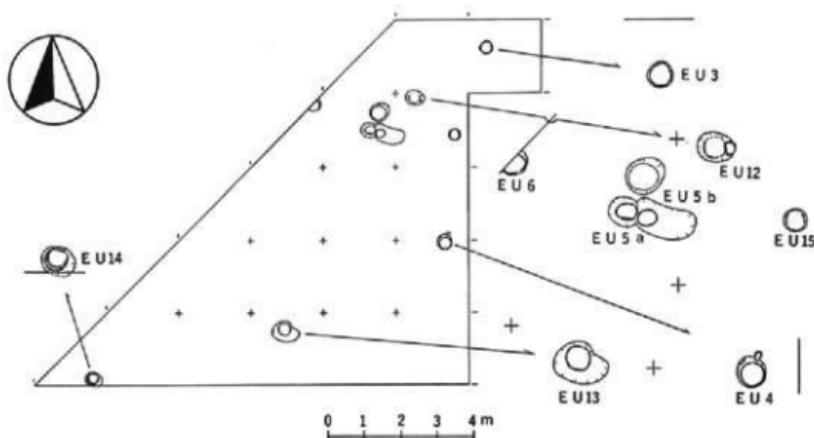
第3図 下野遺跡全体図

上から、第Ⅰ層……暗褐色耕作土（10~20cm）、第Ⅱa層……暗褐色砂質土（1~5cm）、第Ⅱb層……暗褐色砂質土（8~10cm）、第Ⅲ層……黄褐色粘質土（200cm以上）となる。遺物は、Ⅰ・Ⅱa・Ⅱb層に含まれ、遺構の検出面は、第Ⅱb層ないしⅢ層上面である。

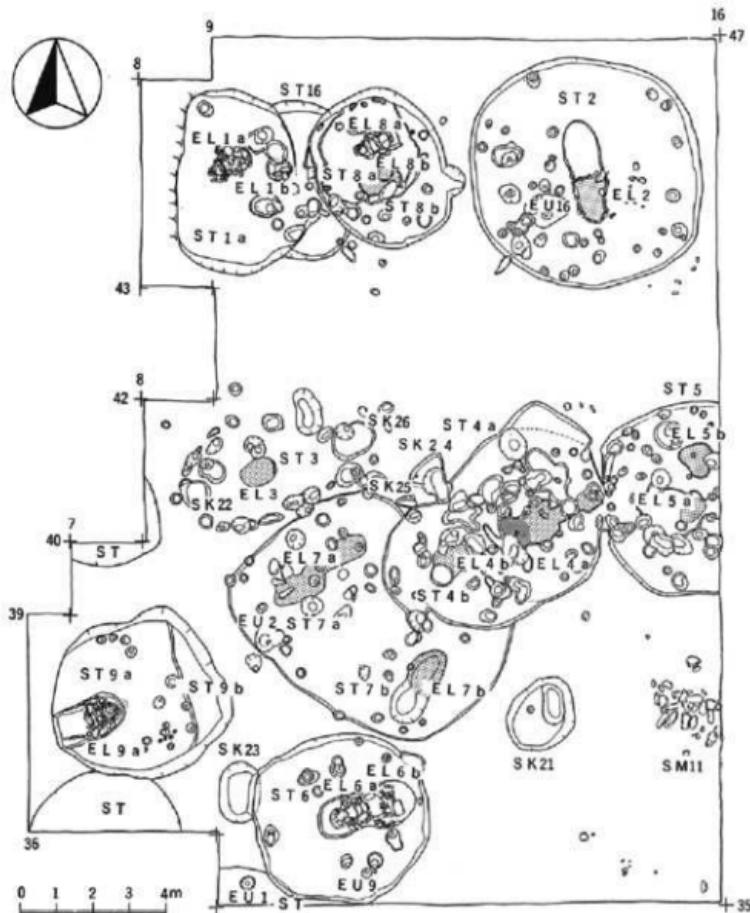
2 遺構と遺物の分布（第3~5図）

調査対象区域に $2 \times 10\text{m}$ 、 $2 \times 2\text{m}$ のトレンチないしグリッドを入れて遺構・遺物の分布を追求したところ、10~20~25~50Gに集中して認められた。調査区の南東部分では、30~25Gで石棒がⅢ層に突刺された状態で単独出土した他は、まばらで遺構等も検出していない。東および北側も同様に遺物の分布を認めなかった。一方、中央北よりの拡張区では、やや多くの遺物、埋甕跡2基などの遺構を検出したが、精査が十分でないため、性格追査までには至っていない。こうした状況から、遺構・遺物の分布は、主として台地の西縁に沿って南~北（除外地杉林にかけて）に伸びていると推測され、標高130~131mの等高線にのっていると考えられる。

西区では、ST1a~ST9bまで重複する住居跡等14棟を検出し、他に調査区のコーナーに係る3棟の住居跡を確認した。さらに、SK21~SK26までの土壙6基、SM11の集石遺構1基がある。住居跡は、ほとんどが重複し、単独で検出したのはST2の1棟にすぎない。時期的には、大木9~10式期に属するもので、複式炉を持つ住居跡が調査区西侧より4棟検出された（ST1a・ST6・ST8a・ST9a）。中央部および東側では、馬蹄形に組んだ石圍炉を持つ住居跡（ST2・ST3）、地床炉を持つ住居跡（ST3・ST4a・ST4b・ST5・ST6）の5棟がある。土壙は、住居跡に隣接するやや大



第4図 遺構配置図（南区）



第5図 遺構配置図（西区）

形のSK21や、住居跡と重複するSK22～SK26の5基があり、15～38Gには、集石遺構SM11がある。その他、住居跡内外からEU1・EU2・EU9・EU16の4基の埋甕跡を検出した。

南区では、土壌1基、埋甕跡9基がある。住居跡等他の遺構はなく、18～20～34GにまとまってEU5a・EU5b・EU12・EU15の4基が検出され、ややはなれてEU3・EU4がある。南区では、埋甕跡が中心となり、住居跡の多い西区とは好対照をなす。

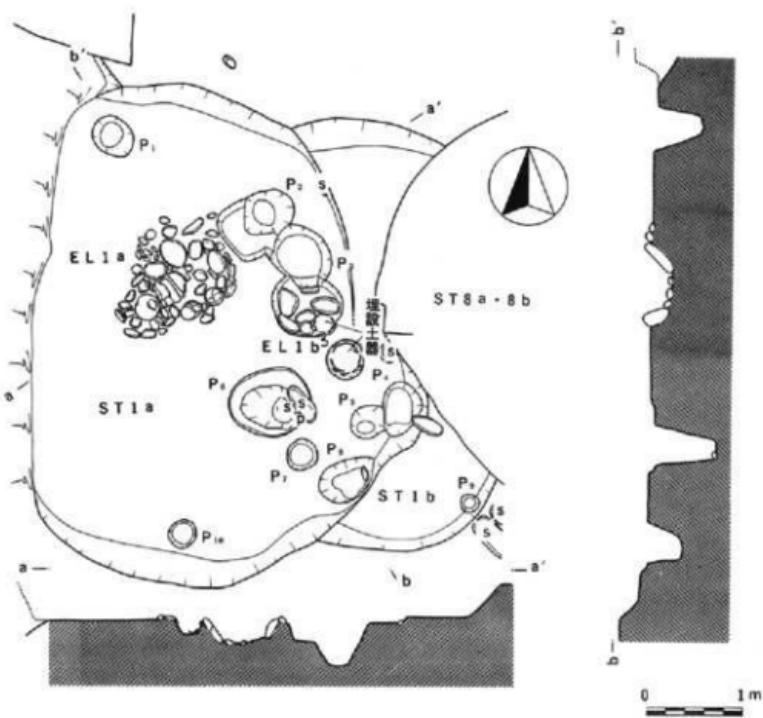
IV 遺構と遺物

1 遺構

住居跡（第6～14図、図版2）

1a・1b号住居跡（ST1a・1b）

(遺構の確認) 8～10-44～47Gに位置し、検出面はII層の上面である。(重複・増改築) ST1aは、ST1bの西半を切って構築され、西壁が段丘端に係るため削られる。ST1bは、その東半もST8bに切られて部分的に遺存するのみである。各新旧は、切り合いかから、ST1b→ST1a、ST1b→ST8b→ST8aの順となる。(堆積土) ST1a・1bとともに遺物混入の少ない2層に分けられる。(平面形) ST1aは、南北にやや長い楕円形で、長径5.15mを計る。ST1bは、ST1a、ST8bに大半を切られるため明確にし得ないが、径4.5mの円形を呈すと推定される。(壁) ST1aは、南と北側の壁が検出され、東壁は、ST1bの床面を掘り込む若干の立上りを確認した。西壁は、段丘崖侵蝕に係り、削り取られて遺存しない。ST1bは、プランの大半がST1a、ST8bに切られて、北壁と南壁の一部が部分的に検出されたのみである。いずれも壁の立上りはゆるやかで、確認面からの深さはST1aが40cm、ST1bが35cmである。(床面) ST1aは、ほぼ平坦で、西側が削られる。ST1bは、大半がST1a・ST8bに切られるため、南と北側に扇状に残り、南側は平坦である。北側は、ST1bの炉(EL1b)の埋設土器に向けてゆるい傾斜をもつ。(柱穴) ST1a・1bのプラン内に、P₁～P₁₀の柱穴が認められ、ST1aでは、EL1bの敷石石組部の掘り込みを切るP₉のほか、P₁・P₈が主柱穴と考えられる。ST1bに関連する柱穴は、P₉の他明確にし得ない。(炉) ST1aに伴う炉(EL1a)は、土器埋設石組部・敷石石組部・前庭部よりなる複式炉である。ST1bに伴う炉(EL1b)は、ST1bにその上面を壊されるが、炉埋設土器を2基伴い、敷石石組部をもつ複式炉と考えられる。EL1bの上位(南東部)にある埋設土器は、強い二次焼成を受け、その周囲は、幅15cm前後で焼土化している。炉の長軸方向は、N-30°-Wで、開口部を北西に持つ。規模は不明である。(出土遺物) ST1aの覆土1～2層にかけて土器片・剥片等若干出土し、2層～ST1aの床面にかけて、大小の円礫(河原石)が多量に出土した。これらの中には、自然礫の他、磨石8、石皿1、砥石1(第30図1)などが含まれている。(年代決定資料) ST1a・1bとともに複式炉の土器埋設土器が遺存する。しかし、いずれも地文繩文のみを認める深鉢の体部下半で、時期を明確にし得ない。覆土内出土々器は、大木9式～大木10式併行のもので、床面での良好な資料の出土はない。P₁・P₈から出土した土器片および炉跡等の形態を考慮して、ST1a・1bとともに大木10式期の所産と考えられる。



第6図 1a・1b号住居跡

2号住居跡 (ST2)

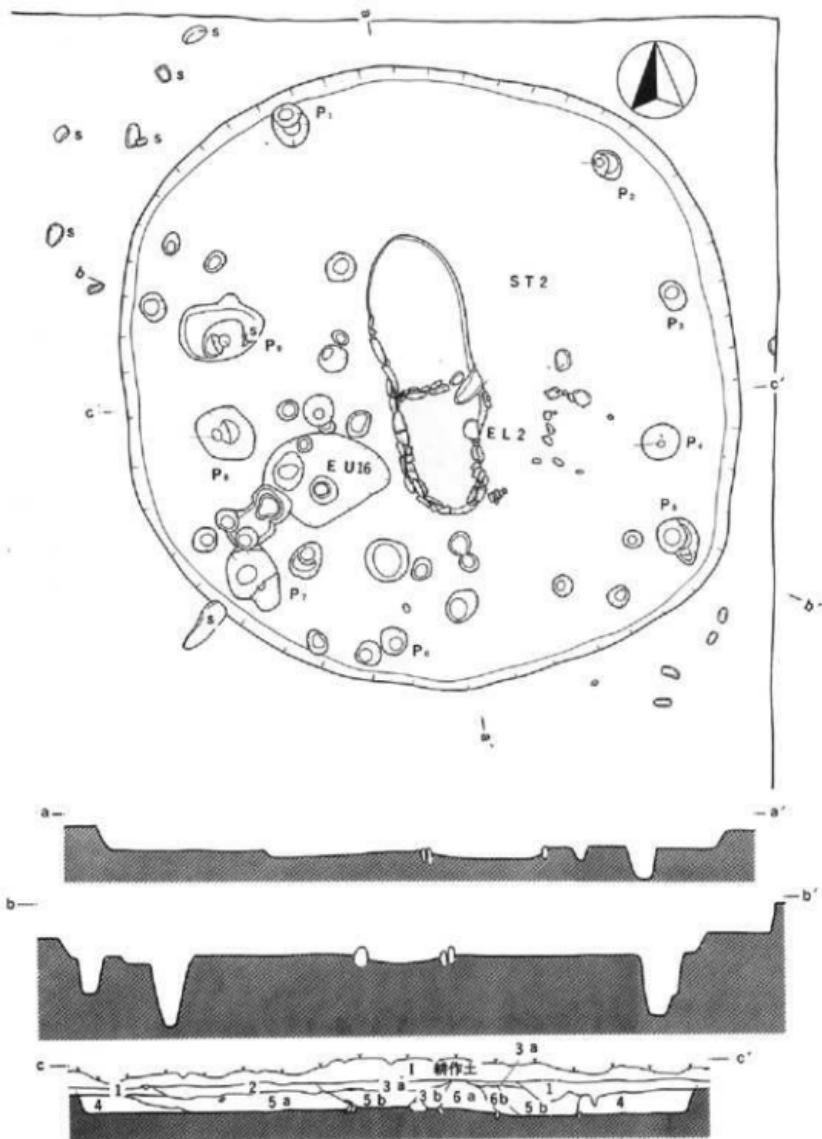
(遺構の確認) 西区の北東隅12~15-44~47Gに位置し、検出面はII層の下面である。

(重複・増改築) 住居跡の北東部分で床面の状態が異なり、柱穴等も西半部ほどには明確にし得ない。EL2の中央東側部分も石組が擾乱を受けるなど、ST2を切る小さな遺構の存在が推測されたが、調査では明確にできなかった。覆土の観察では、6b層を境に堆積の状況に違いが認められる。(堆積土) 基本的に1~6層に区分でき、混入物の違い等でa・bに細分できる。炭化物を多く含む5b層はEL2の上面および、EL2の東側に認められ、焼土ブロックの6b層は、5bと6a層の間にある。(平面形) 規模の大きな略円形で、プラン東側および西側が幾分丸味を欠く。南北6.5m、東西6.36mを計る。(壁) 壁での切り合いがなく、完全に検出された。深さは、検出面から20~25cmである。(床面) 住居跡北東の四半分程を除いて平坦で、一定している。(柱穴) 住居内に切り合いを含めないで35個の柱穴

が認められ、P₁～P₉が主柱穴と考えられる。(炉) 住居内中央に位置し、2列の石組を馬蹄形にするもので、中央に仕切りを持って北西に開く。炉は、石組内部が焼け、袖石を持つ前庭部は加熱を受けない。石組は、西側が良好に遺存し、東側は一部擾乱を受ける。(その他の施設) 炉の東、13-45G東よりに埋甕(E U16)が検出された。掘り込みは、S T 2の柱穴に切られ、時期的にS T 2より古い。埋甕(第27図1)は、逆位に埋置されたもので、底部はS T 2の床面よりわずか下位に位置する。床面の精査・柱穴の検出作業段階で確認された。土器は、頸部がしまり、口縁の外反するもので、体部上半に最大径をもつ。文様はなく、浅い繩文地文のみを認める大形の粗製深鉢である。器形および、住居との切り合い等から、大木9式前半に併行する時期の所産と考えられる。掘り込みの長径は133cm、短径95cmを計る。(遺物の出土状況) 遺物は、主として住居跡の南半に多く検出され、床面直上の覆土5a層下面に集中的にみられた。位置的にはE L 2に西接して多い。P₉の上位、覆土5a層上面から下面にかけて、押しつぶされて深鉢を中心に、多量の炭化クルミが出土している。(時期決定資料) E L 2の石組に接した床面出土の深鉢がある(第26図1)。隆線の渦巻文を四単位で施す深鉢で、大木9式前半に併行する。

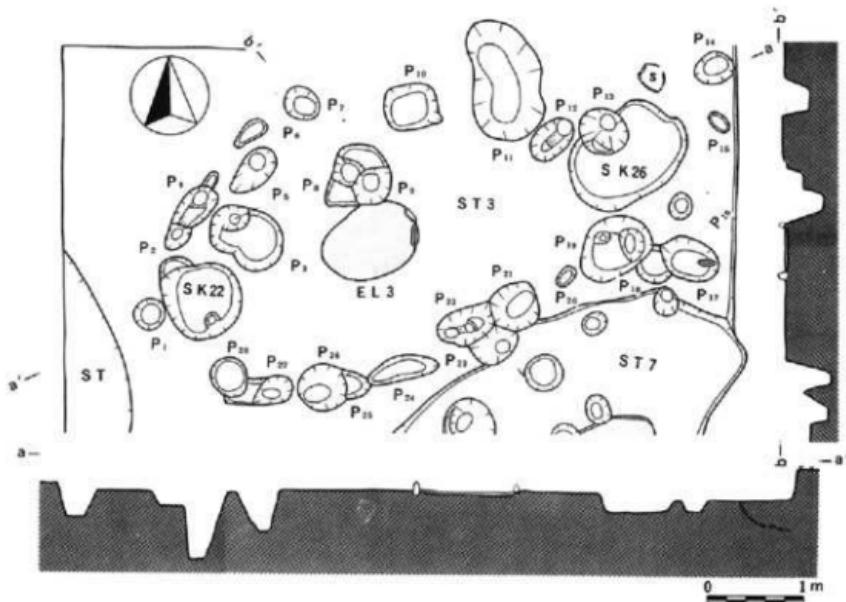
3号住居跡(S T 3)

(遺構の確認) 8-11-41-42Gに位置し、S T 7に北接する。確認面は、II層下面である。(重複・増改築) 周溝・柱穴・炉跡のみの検出で明確にし得ないが、東側でS K26、西側でS K22等の土壤が住居跡を切ると考えられる。(平面形) 柱穴や周溝の配列から、東西に長い楕円形を呈すと推定され、長径約4.5m、短径約3.3mの規模をもつ。(堆積土) 掘り込みの浅い住居跡で、耕作による擾乱のため不明である。柱穴や周溝の覆土は、暗褐色微砂質土で炭化物・土器片等を若干含む。(壁) 確認されない。(床面) ほぼ平坦で、II層の下面を床面としている。床面の高さは、S T 7より8cm、S T 4 bより17cm、S T 9 aより61cmそれぞれ高い。貼床等は、特に認められない。(柱穴・周溝) 裏に沿って断続的に検出されるP₁～P₂₈の28個のビットがある。この内、住居の柱穴と考えられるのは、配置と掘り込みの深さから、P₄・P₁₀・P₁₃・P₂₁・P₂₆の5個である。その他、掘り込みの深いものにP₃・P₅・P₁₂・P₂₂があり、床面から50-60cm掘り込まれている。周溝は、掘り込の浅い小ビットが断続的に連なるもので、掘り込みは床面から6-25cmを計る。P₁・P₂・P₆・P₇・P₂₀・P₂₄・P₂₅・P₂₇等が該当し、その間に柱穴が配される形となる。(炉) 住居跡の中央に位置し、東西に長い不整楕円形の焼土跡を認める。焼土の範囲は長径130cm、短径75cmを計り、東側に炉の石組と考えられる2個の礫が残る。石囲炉と考えられる。(出土遺物) 擅乱を受け、まとまった遺物の出土はない。(時期決定資料) 床面および柱穴から出土した土器がある。住居跡の時期は、大木9式前半と考えられる。



- 1 噴褐色微砂（炭化物・土器片を含む）
 2 噴褐色微砂（炭化物を多く含む）
 3 a 噴褐色微砂（粘土粒を含む）
 3 b 噴褐色微砂
 4 噴灰褐色微砂（炭化物を含む）
 5 a 噴黃褐色微砂（炭水化物・土器・陶等を多量に含む）
 5 b 噴黃褐色微砂（炭水化物を多く含む）
 6 a 黃褐色（粘土ブロック）
 6 b 噴褐色微砂（燒土ブロックを含む）

第7図 2号住居跡



第8図 3号住居跡

4a号住居跡 (ST 4a)

(遺構の確認) 12~14~40~42Gに位置する。検出面はII層上面である。(重複・増改築) 西南部でST4bを切り、東側でST5に切られる。さらに、ST4a・4bは、SK24に切られている。各住居跡の新旧は、ST4b→ST4a→ST5となる。柱穴の配列から改築等も考えられるが、調査では明確にできなかった。(平面形) 検出された壁、柱穴の配置から、南北にやや長い楕円形と考えられる。長径4.9m、短径約4.2mを計る。(堆積土) 3層確認された。1・2層が主体をなし、水平堆積を示す。3層は部分的である。(壁) 主として南東~東側で検出され、西南部では切り合いのため明確に検出できなかった。北東の壁は、作業のミスから本来の壁を壊して北側に掘りすぎている。残存する壁の高さは、南東壁で8~19cmを計る。(床面) 遺存する床面は、ほぼ平坦である。住居の北半および西半は、大小のピットや浅い掘り込みから凹凸が著しい。(柱穴) 40個近いピットが検出された。この内、配置と深さから、壁に沿うP₁~P₉のピットが主柱穴と考えられる。周溝は認めない。(炉) 中央部・東側に焼土が検出され、中央西側よりが強く加熱を受ける。焼土の範囲は、



第9図 4a・4b号住居跡

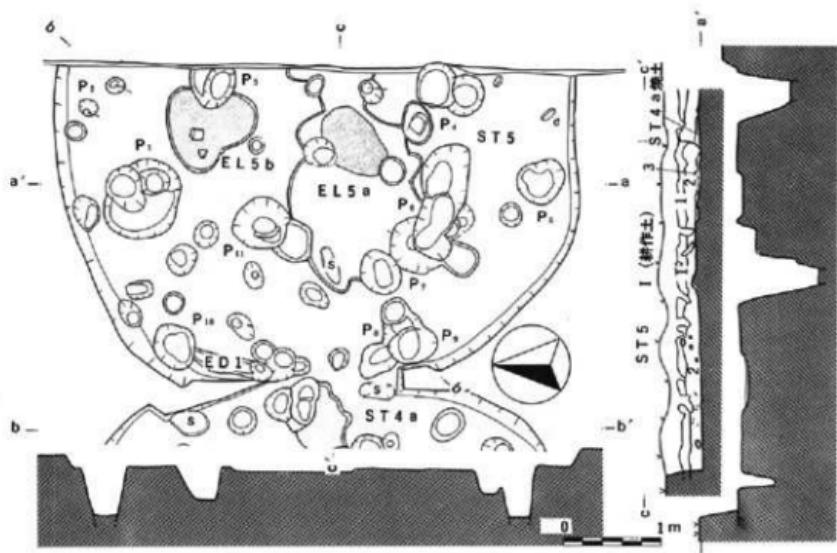
長径2m、短径1mである。石組は認めず、地床炉と考えられる。(出土遺物)覆土1層～2層にかけて多量の礫と遺物が検出された。(時期決定資料)床面・柱穴内出土土器が住居の年代を知る資料となり、時期は大木9式前半の所産と考えられる。

4 b号住居跡(ST 4 b)

(遺構の確認)11～13～39～41Gに位置し、当初 ST4b を含めた長楕円形プランとして検出された。検出面はII層の上面である。(重複・増改築)ST 4 bは、ST 7の東側を切り、ST4a によって東北半を切られる。さらに北側でSK24に切られている。(平面形)ST4bとの切り合いから全形は不明であるが、柱穴等の配置から、東西にやや長い長楕円形を呈すと考えられる。長径約4m、短径約3.5mを計る。(堆積土)2層からなり、水平堆積を示す。1・2層ともに遺物・炭化物を多く含んでいる。(床面)遺存部分はほぼ平坦で、ST4bと切り合う東北半は、柱穴等の切り合いから凹凸が著しい。床面のレベルは、ST4bと変化はない。(柱穴)ST 4a に伴う柱穴との判別は困難であるが、切り合いや配置、および深さから見て、P₁₁～P₁₈がST 4b に伴うものと考えられる。周溝は認めない。(炉)住居跡のほぼ中央に位置し、P₁₉に切られる焼土(EL4b)がある。長径100cm、短径85cmの規模で検出され、石組等の施設はない。地床炉と考えられる。(出土遺物)覆土1～2層にかけて、礫・遺物が多く出土している。床面でのまとまった遺物はない。(時期決定資料)床面・柱穴内出土々器および遺構の切り合いから大木9式前半の所産と考えられる。

5号住居跡(ST 5)

(遺構の確認)14～16～40～42Gに位置し、住居跡の東半は調査区外に係る。検出面はII層の上面である。(重複・増改築)半完掘のため全体については不明である。住居西側でST4bを切る。(平面形)検出した壁から、径5.45mの円形を呈すと考えられる。(堆積土)3層に区分でき、ほぼ水平な堆積状況を示す。(壁)ST 4 aと接するように切り合う西側部分を除いて良好に遺存する。深さは、検出面から5～20cmを計る。(床面)ほぼ平坦であるが、EL5aの部分が浅く落ち込む。(柱穴)検出した床面から、切り合い等のあるビット30数個が検出された。配置や深さからP₁・P₃・P₄・P₅・P₆・P₈・P₉・P₁₀・P₁₁が主柱穴と考えられる。P₁₀南側には、周溝状のED1が認められる。(炉)焼土は、EL5a・EL5bの2ヶ所で認められ、EL5aがST 5に伴うと考えられる。石組等は確認できなかつたが、全体に浅い掘り込みがあり、P₇の北側に袖石様の礫がある事などから、石組を持つ可能性がある。焼土の範囲は、EL5aで長径80cm、短径50cm、EL5bで長径93cm、短径90cmである。(出土遺物)住居の中央～北側にかけて、覆土1～2層内より多量の礫・遺物が出土している。(時期決定資料)床面および柱穴内等出土の土器片がある。また、ST 7から続く一連の住居の中では、その切り合いから最も新しい時期の所産と言える。土器は、幅のせまい縦位の平行沈線間を磨消するものがあり、大木9式の後半と考えられる。

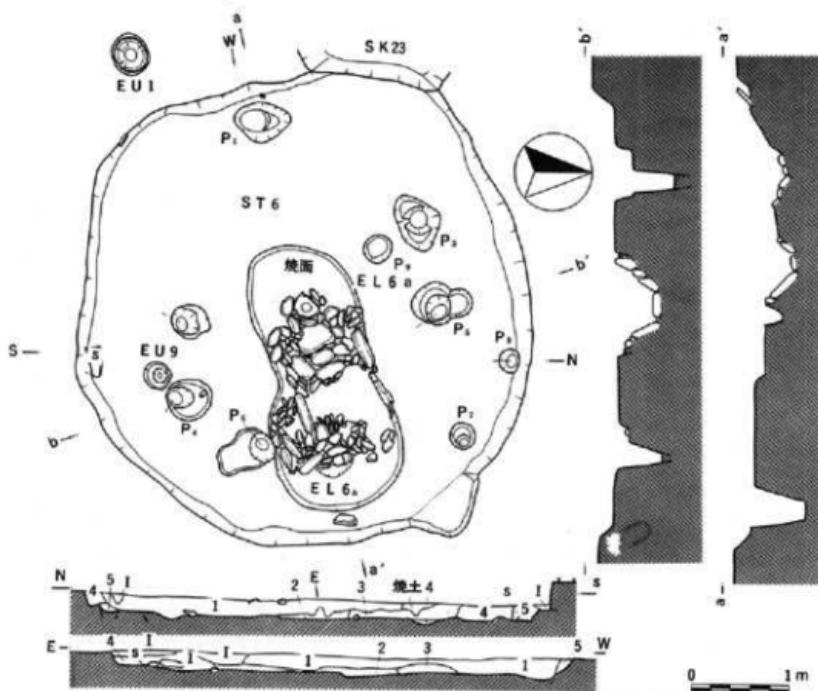


第10図 5号住居跡

6号住居跡 (ST 6)

(遺構の確認) 9~11~36~38Gに位置し、ST 7に南接する。検出面はII層上面である。

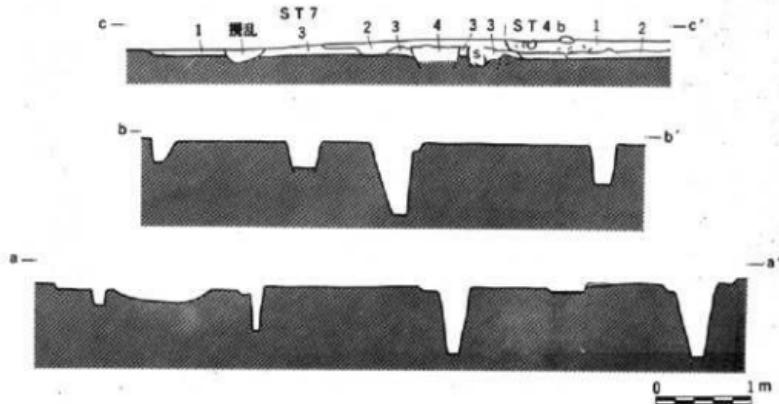
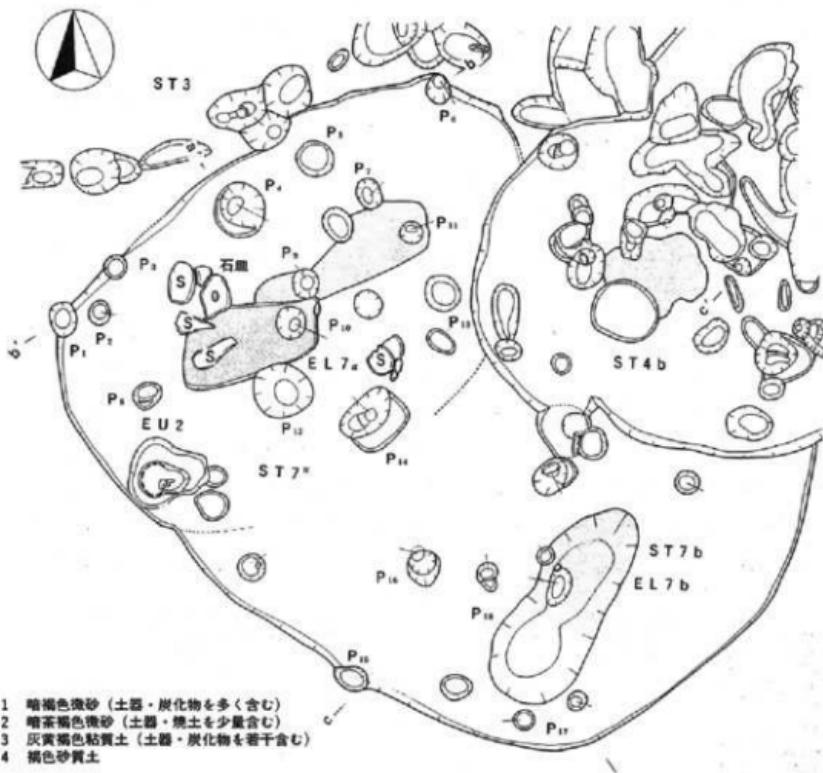
(重複・増改築) 西北壁がSK23に切られる。住居は、炉跡の切り合いと柱穴の配置から、改築されている事が判る。住居プランの拡張等は認められない。(平面形) 検出された壁は、略円形を示すが、西壁の湾曲がやや弱い。東西4.83m、南北4.76mを計る。(堆積土) 5層に区分でき、壁の近くに4・5層が堆積する。住居の中央部には、1・2層が堆積し、3層は炉埋設土器の附近に部分的に堆積している。(壁) SK23に北西壁を若干切られる。また、北東壁が一部攪乱されるが、全体に良好に遺存している。床面からの高さは、10~22cmを計る。(床面) ほぼ平坦であるが、炉跡(EL 6a・6b)部分がやや低い。貼り床等は認められない。(柱穴) P₁~P₉の9個の柱穴が検出された。掘り方の深さと配置から、P₁~P₅が主柱穴と考えられ、EL 6aの新しい住居に伴う柱穴は、P₁・P₂・P₃の3個、改築前のEL 6aに伴う柱穴はP₁・P₄・P₅の3個、P₁は共用と考えられる。(炉) EL 6aは、土器埋設石組部・敷石石組部・袖石石組部よりなる複式炉である。EL 6bは、EL 6aに壊されるが、同様の複式炉と考えられ、全体に東よりに構築される。(出土遺物) 埋設土器(第25図12)、床面・土々器がある。時期は、出土々器の文様から大木10式前半と考えられる。



第11図 6号住居跡

7号住居跡 (ST 7)

(遺構の確認) 9~13~38~41Gに位置し、II層上~中位面で検出した。ST 3同様、掘り込みが浅いため、プランの確認が困難であった。調査では、EL 7aを伴う住居プランと、EL 7bを伴う住居プランの判別ができず、結果的に同一プランとなっている。以下では、前者をST 7a、後者をST 7bと区別して記載する。(重複・増改築) ST 7a・7bの北東部をST 4bが切る。(平面形) ST 7aは、長径5.45m、短径約3.4mの梢円形を呈す。ST 7bは、EL 7bを中心とする梢円形を呈すと考えられるが明確ではない。(堆積土) ST 7bでは4層に区分でき、1~3層が主体となる。ST 7aも基本的に同様であるが、炭化物・遺物等の混入が多い。(壁) ST 7aは、北西~北東壁が検出され、そのプランが堆定できる。ST 7bは、西南~南東壁の確認にとまる。(床面) ST 7a・7bともほぼ平坦で同一レベルである。(柱穴) P₁~P₁₄のほか、小ビットを14個検出した。全体に配列等が不整で明確にし得ないが、P₁~P₁₄のビットがST 7aの範囲内でまとまり、P₄・P₁₄等が主柱穴と考え

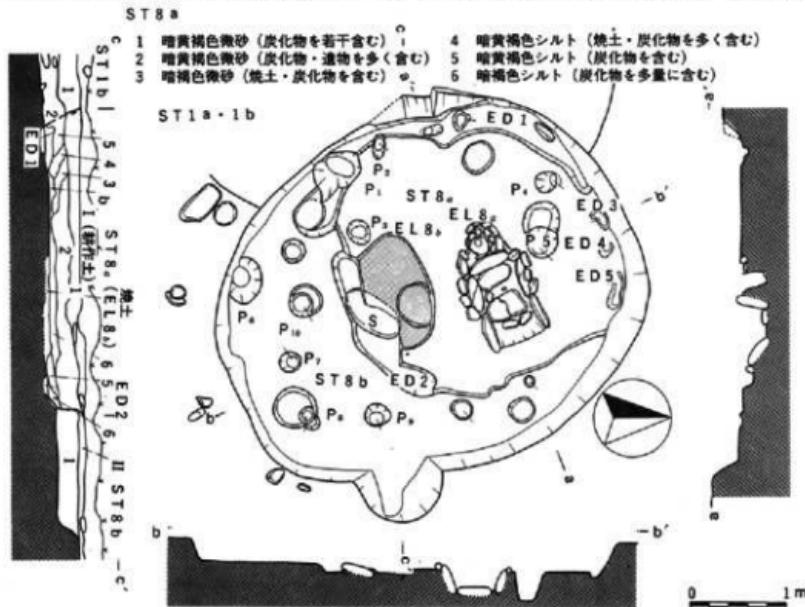


第12図 7a・7b号住居跡

られる。(炉) EL 7aは、西側部分が幾分掘り込まれ、N-56°-Eの長軸方向を示す。EL 7bは、床面から10cm前後の掘り込みがあり、北東半に加熱を受ける。長軸方向はN-34°-Eである。(出土遺物) EL 7aの北西に接して加熱を受けた石皿(第30図10)が検出された。(時期決定資料) ST 4bとの切り合いと、床面および柱穴等出土々器片がある。

8a・8b号住居跡(ST 8a・8b)

(造構の確認) 10~12~45~47Gに位置し、検出面はST 8aがII層上面、ST 8bがII層下面である。(重複・増改築) 住居西側でST 8bがST 1bを切る。ST 8bが埋まつた後、ST 8aがST 8bの西~北側の壁を一部共有する形でST 8bを切る。構築の順序は、ST 1b→ST 8b→ST 8aの順に新しくなる。(平面形) ST 8aは、西~北側の壁と周溝から、径2.9mの隅丸方形を呈す。ST 8bは、検出された壁から、長径4.4m、短径3.7mの楕円形プランを持つ。(堆積土) ST 8aは、1~6層に分けられ、1・2層が主体をなす。3~5層は、壁際に分布し、6層は床面に乗る。ST 8bでは、1層を認めるのみで、細分できない。人為的な堆積状況を示すと考えられる。(壁) ST 8aは北西壁をST 8bと共有する。南東半の壁は明確に検出し得なかったが、ST 8bの床面を一段掘り下げている事から上りは明瞭である。ST 8bではほぼ完全に検出した。床面からの高さは、北側で30cm、南側で20cmを計る。(床面) ST 8aはほぼ平坦で、ST 8bも遺存部分は平坦である。(周溝) S

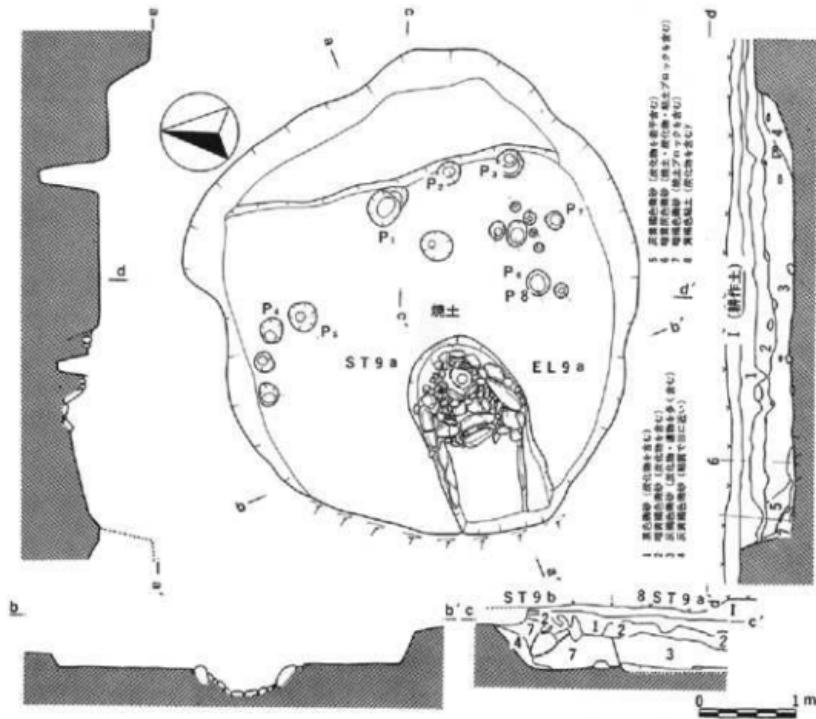


第13図 8a・8b号住居跡

T8aで、ED 1～5の周溝が認められ、ED 1・2は、各々西・南壁に沿う深さ5～6cmの溝状を呈す。ED 3～5は、3～6cmの断続する小ピット列である。(柱穴) ST 8a・8b内に、P₁～P₁₀のほか、10個の小ピットを検出した。この内、ST 8aに伴うと考えられる柱穴は、P₁～P₅が考えられ、ST 8bではP₆～P₁₀がある。全体に不整で、配置等は不明である。(炉) ST 8aは、土器埋設石組部・敷石石組部・袖石石組部よりなる複式炉を持つ。ST 8bでは、ST 8aに壊されて不明であるが、中央南よりに浅い掘り込みと加熱を受けた大きな扁平砾が認められた。(出土遺物) ST 8aの覆土2層を中心に土器片約250片、凹石・磨石など12点がある。ST 8bはほとんど遺物の出土がない。(時期決定資料) ST 1bとの切り合い、およびEL 8a炉埋設土器がある。時期は、大木10式期の所産と考えられる。

9a・9b号住居跡 (ST9a・9b)

(遺構の確認) 6～9～37～40Gにあり、ST 6の北西に位置する。検出面はII層の上面である。(重複・増改築) 南側で、未確認の住居跡をST 9a・9bが切る。さらに、ST 9aは、埋没中半のST 9bを切って構築される。(平面形) ST 9aは、東壁がやや直線的にな



第14図 9a・9b号住居跡

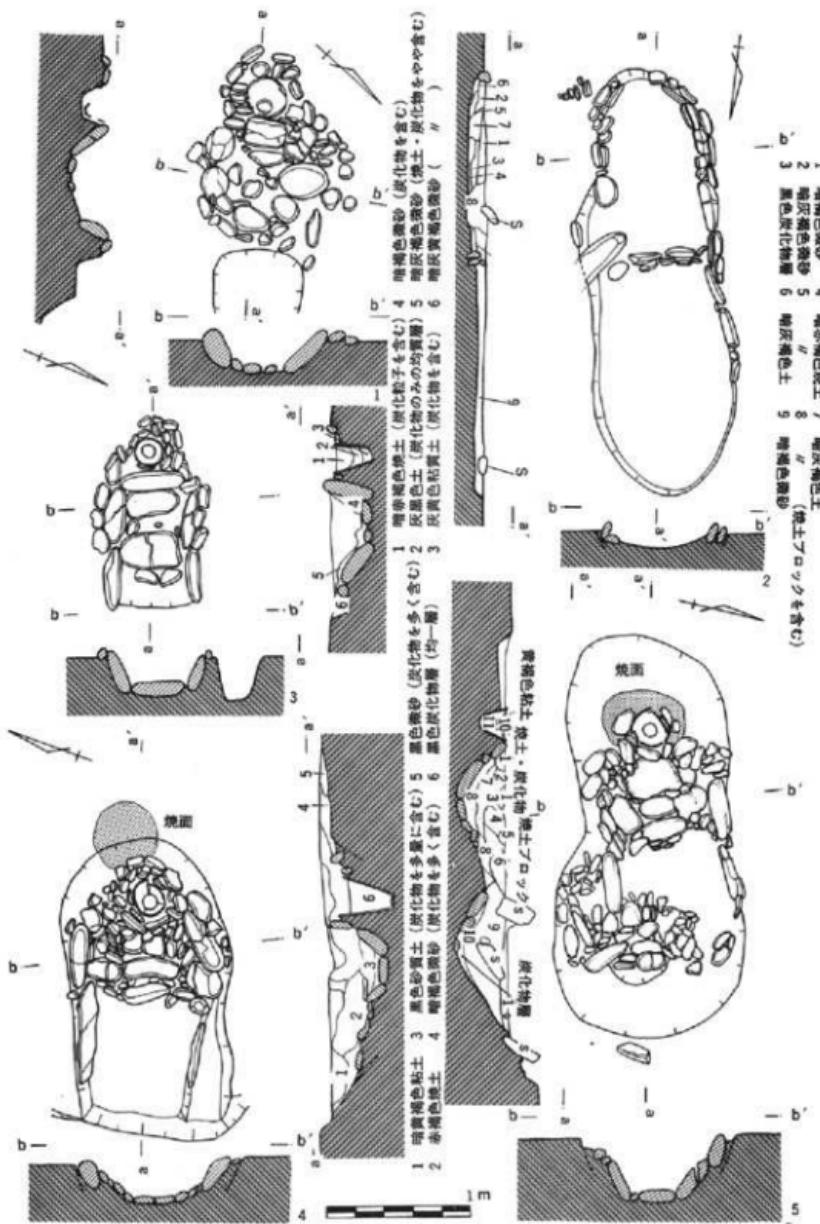
り、S T 9 bは略円形を呈す。規模は、E L 9 aの主軸の方向で3.8m(S T 9 a)、4.8m(S T 9 b)を計る。南北径は、S T 9 a・9 b同一で4.5mを計る。(堆積土) S T 9 aは、4層に区分でき、S T 9 bは1・2・4・7層の覆土堆積層がある。地山の崩壊土と考えられる4層が壁際に分布し、7層はS T 9 bに伴っている。S T 9 aでは、1～3層が主体となり、中央でやや窪む水平な堆積状況を示す。(壁) S T 9 aは、S T 9 bの覆土7層を掘り込む東壁を除いて、S T 9 bと同一壁を共有する。東壁は、セクションで観察されたほか、S T 9 bの床面を10cm前後掘り込んでおり、その立上りが明確に判別できる。S T 9 bは、西側が段丘崖の侵蝕で削られるほか、ほぼ完全に検出された。東壁の高さは、S T 9 bの床面から46cm、南壁の高さはS T 9 aの床面から53cmである。(床面) S T 9 aの床面はほぼ平坦であるが、わずかに西側に傾斜する。S T 9 bの遺存する床面は、平坦である。(柱穴) S T 9 aの床面東半を中心にP₁～P₈のピットのほか、9個の小ピットが検出された。S T 9 aに伴う主柱穴と考えられるのは、配置と深さからP₁・P₄・P₈の3個である。S T 9 bについては明確でない。(炉) S T 9 aに伴うE L 9 aは、土器埋設石組部・敷石石組部・袖石石組部よりなる複式炉である。S T 9 bについては明確にし得ないが、E L 9 aの炉埋設土器の検出中、土器埋設石組部の東側下面より、E L 9 aの掘り方に壊される埋設土器(第26図3)を検出した。(時期決定資料)床面出土々器、炉埋設土器等があり、大木10式期の所産と考えられる。

各住居跡炉

1a号住居跡炉 住居跡北東側に位置し、土器埋設石組部・敷石石組部・袖石石組部ないし前庭部の三部分からなる土器埋設石組複式炉である。土器埋設部を住居跡中心よりに置き、敷石石組部、前庭部が北東に開口する。前庭部の袖石は確認されない。全体に遺存が悪く、埋設土器も、深鉢形土器の体部下半から底部の部分が一部残るのみである。土器埋設石組部から敷石石組部までの長さ1.4m、最大幅1.15mで、炉の長軸方向はN-43°-Eを計る。前庭部は、柱穴と重複するが、住居跡北東壁までは達していない。

2号住居跡炉 住居跡中央部分に位置し、5cm幅前後の細長い河原石を2列組で用いて馬蹄形にする石囲炉である。炉の中央部で仕切り、袖石様の石組が北側に伸びるが、東側では確認されない。焼面は、中央の仕切りから石組の閉じる前面にのみ認め、開口部分にはない。長さ2.95m、最大幅1.02m、炉の長軸方向はN-14.5°-Wを計る。

8a号住居跡炉 住居跡北東側に位置し、土器埋設部を住居跡のほぼ中心部に置く複式炉である。前庭部は、北東に開くが、住居跡壁面までは達しない。長さ1.3m、最大幅79cm、炉の長軸方向は、N-65°-Eを計る。全体に小形ながら、土器埋設部との仕切りや敷石石組部、前庭部の袖石に厚さ10cm、長さ25～35cmの大きな隙を用いて堅固に構築している。埋設土器は、口縁部・底部を欠く深鉢を正位に置くもので、二次焼成を受ける。



第15図 各住居跡炉

1-1 a号住居跡炉 (EL 1 a) 2-2号住居跡炉 (EL 2)
 3-8 a号住居跡炉 (EL 8 a) 4-9 a号住居跡炉 (EL 9 a)
 5-6号住居跡炉 (EL 6 a + b)

9a号住居跡跡炉 住居跡西側に位置し、土器埋設部を住居跡中央西よりに持つ。前庭部は、住居跡西壁と接し、扁平で長い大きな袖石を両側に認める。長さ1.9m、最大幅1.12m、炉の長軸方向はN-69°-Eを計る。形態的には、敷石石組部の長軸方向の幅がせまく、全体につまた形で、前庭部がやや長い。埋設土器は、直線的に開く粗製の完形深鉢で、覆土に炭化物のみが入って検出された。構造的には3、5の複式炉と共に、土器埋設部に小砾で埋設土器を2重に囲み、敷石石組部に大きな砾で仕切り・両側・底面を築く。

6号住居跡跡炉 住居跡東側に位置し、土器埋設部を住居跡のほぼ中央に持つ。土器埋設部、敷石石組部、前庭部よりなる複式炉で、住居の建替えによる重複がある。前庭部は、旧炉跡の敷石部を埋めて築かれ、東に開口する。両側には扁平で大きな1枚石の袖石がある。旧炉跡との重複から前庭部の規模を明確にし得ないが、住居跡東壁までには至っていない。埋設土器は、口唇の強く内湾する底部を欠く浅鉢で、二次焼成を受ける。また、土器埋設部の周囲15cm前後の範囲が強く加熱されて焼土化している。炉の長さ1.5m(袖石東端まで)、最大幅1mで、長軸方向は、N-76°-Eを計る。

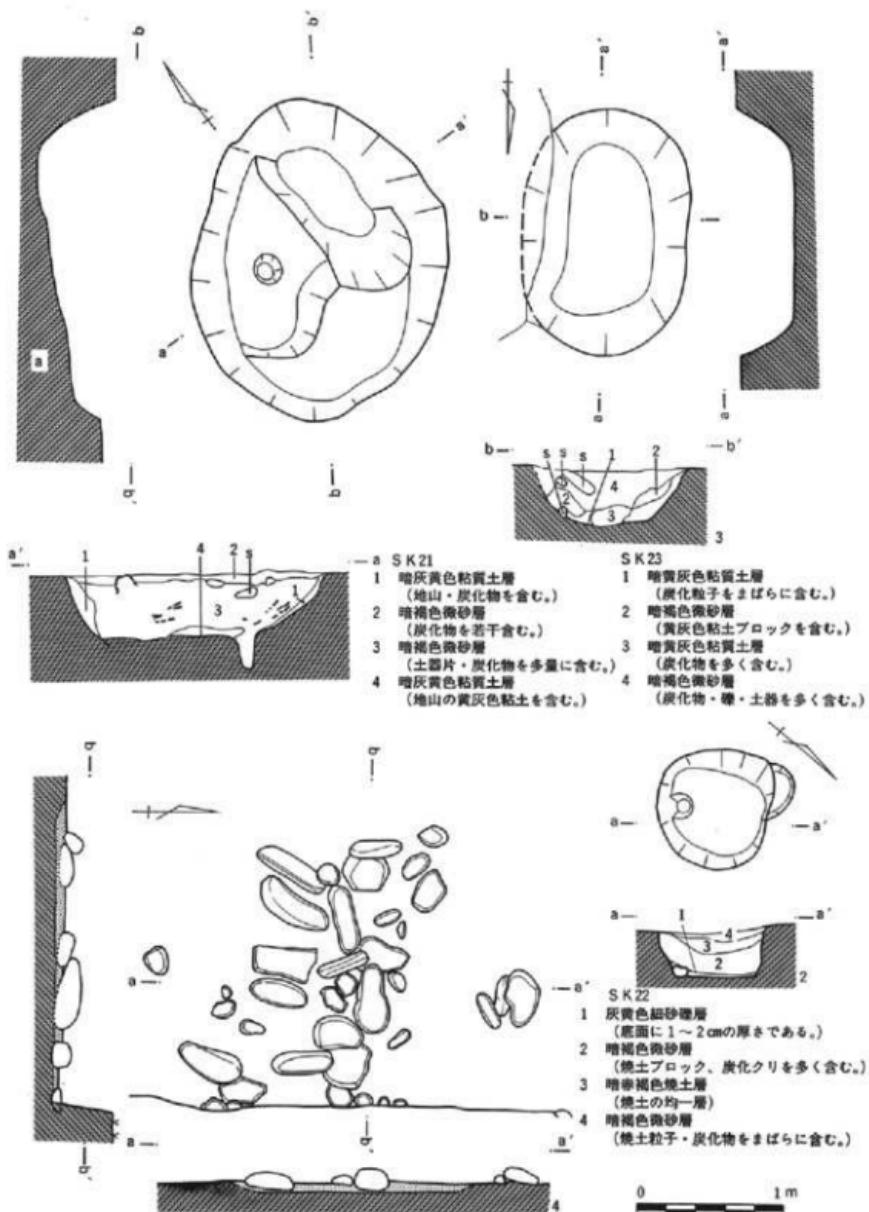
土壤・集石

S K21 13-38Gに位置し、不整円形を呈す。長径2.2m、短径1.7m、確認面からの深さ20~50cmを計る。西側から傾斜して北東で深くなる底面の中段には1個の柱穴がある。覆土は、4層からなり、2~3層にかけて多量の土器片、剝片、砾、炭化物を含んでいる。出土々器は、主として大木9式土器が大半を占む。

S K22 9-41Gに位置し、3号住居跡内にある。形状は、略円形を呈し、長径88cm、短径77cmを計る。検出面はII層下面で、III層を32cm程掘り込んでいる。覆土は、4層からなり、底面に細砂・小砾の薄い層がある。2層は、焼土ブロック・炭化クルミを多量に含み、3層は焼土の均一層である。底面には径18cmの小ピットが検出された。時期は、出土々器から大木10式期と考えられる。

S K23 9-37Gに位置し、6号住居跡北西壁と重複する。新旧は、切り合いから土壤がより新しく、6号住居跡の壁・覆土を切る。形態は、南北に長い梢円形で、長径1.7m、短径1.14m、検出面からの深さ32cmを計る。覆土は、4つに区分でき、4層を中心に土器片・砾・炭化物を多量に含んでいる。時期は、切り合い・出土々器から大木10式期と考えられる。

S M11 15-38Gに位置し、5号住居跡の南、21号土壤の東2mにある。39個の大小の河原石で構成され、幅1m、長さ2mの部分に集中している。砾の集中部分では、5~6cmの厚さで底面が焼け、焼土化している。砾底面は、III層の上面に乗る。全体に、明瞭な掘込みは認めず集中部がやや凹む程度である。時期は、大木9式期の所産と考えられる。



第16図 土壌・集石遺構 1—21号土壤 (SK 21) 2—22号土壤 (SK 22)
3—23号土壤 (SK 23) 4—11号集石 (SM 11)

埋甕跡

E U 1 9—36Gに位置し、6号住居跡の南西壁に近接する。確認面は、II層下面で、プランのみ検出した住居跡の覆土を10cm程掘り込む。掘り込みは、ほぼ円形で、径44cmを計る。土器は、正位に埋置させた大木10式併行の沈線区画の文様をもつものである。

E U 4 南区20—32Gに位置し、18—20—34Gの1群からやや南東による。確認面はII層下面で、III層を30cm掘り込む。掘り込みは、ほぼ円形で、径41cmを計る。土器は、正位に埋置された口縁を欠く粗製深鉢である。

E U 6 南区18—34Gに位置し、西半が調査区外に係る。掘り込みは略円形と考えられ、径42cm、深さ31cmを計る。土器は逆位に埋置された底部を欠く粗製深鉢である。

E U 13 南区18—31Gに位置し、他と大部離れて単独で検出された。掘り込みは、上面で不整梢円形を呈し、中段北よりが円形となる。上面の長径76cm、短径40~54cmで、深さ28cmを計る。土器は、正位に埋置された粗製深鉢である。

E U 3 21—35G北西よりに位置する。掘り込みは土器の径よりやや広い円形で、径38cm、深さ27cmを計る。土器は、逆位に埋置され、底部を欠く粗製深鉢である。

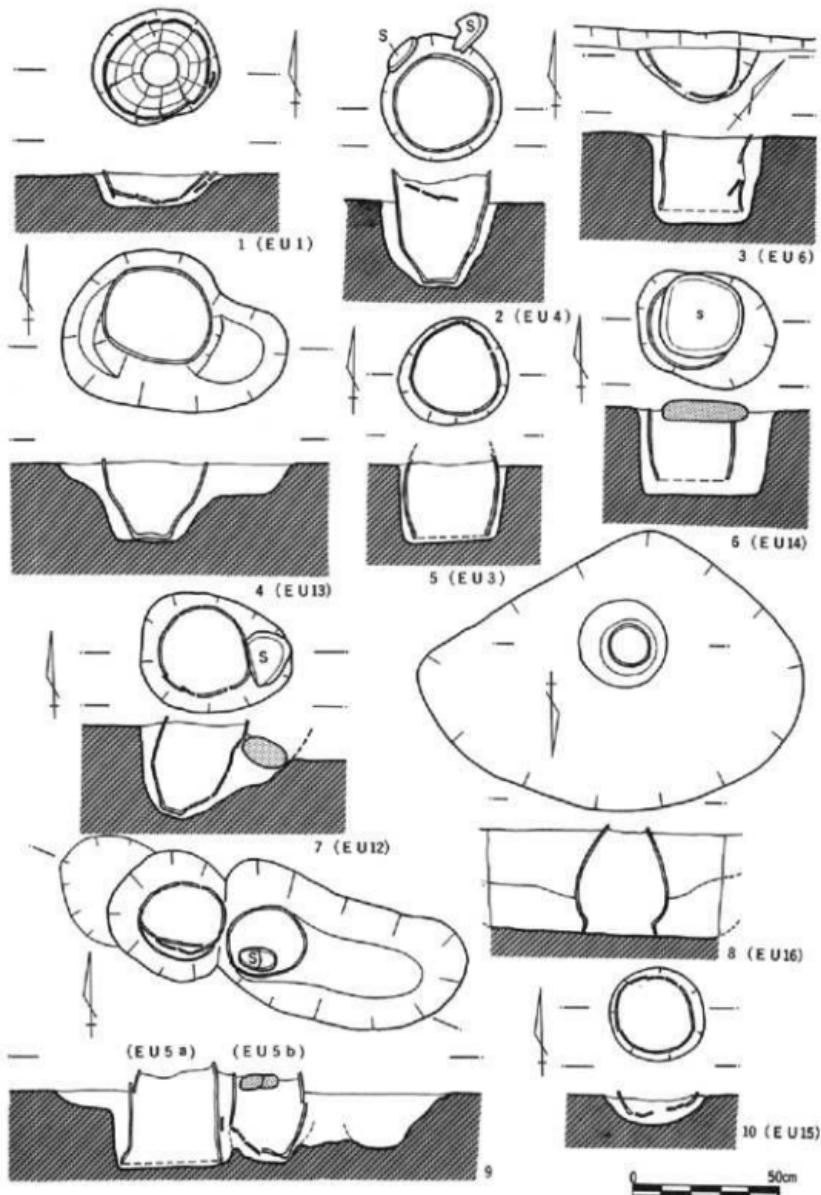
E U 14 南区の最も西よりに検出されたもので、15—31G中央東側に位置する。掘り込みは梢円形で、長径50cm、短径38cm、深さ30cmを計る。土器は、逆位に埋置された粗製深鉢で、蓋石様の厚さ7cm、径28cmの扁平碟が上面に乗る。

E U 12 南区20—34Gに位置し、E U 5a・5b、E U 15に近い。掘り込みは、略梢円形で、長径52cm、短径40cm、深さ30cmを計る。東側は攪乱を受け削平される。土器は、文様をもつ大木10式併行のもので、正位に埋置されるがやや東に傾く。東接して押え様の厚さ9cm、長さ15cmの碟を土器の体部中程に伴う。

E U 16 2号住居跡の炉西側に位置し、住居跡の柱穴から掘り込みの埋土が切られる。掘り込みは、不整梢円形で、長径133cm、短径95cmを計る。土器は逆位の埋置で、底部を欠く。地文繩文のみの粗製深鉢で、時期は大木9式前半に併行する。

E U 5a・5b 南区19—34Gに位置し、E U 5a、E U 5bが重複する。プラン、セクションの観察からその新旧は決しかねたが、E U 5aが新しいと考えられる。E U 5aの掘り込みはほぼ円形で、径45cm、深さ27cmを計る。土器は地文繩文のみの粗製深鉢で、逆位に埋置され、底部を欠く。E U 5bの掘り込みは、長梢円形で、長径87cm、短径43cm、深さ25cmを計るが、底面形から見て東側で他との重複も考えられる。土器は地文繩文のみの粗製深鉢で、体部上面に厚さ5cm、径13cmの碟を含み、正位に埋置される。

E U 15 南区20—34G中央東側に位置する。掘り込みは円形で、径33cm、深さ9cmを計る。土器は、正位に埋置された粗製深鉢であるが、削平を受けて全体の遺存が悪い。



第17図 埋藏跡
 2—4号埋藏跡 (EU 4) 5—3号埋藏跡 (EU 3)
 3—5号埋藏跡 (EU 6) 5—14号埋藏跡 (EU 14)
 1—1号埋藏跡 (EU 1) 4—13号埋藏跡 (EU 13) 7—12号埋藏跡 (EU 12)
 8—16号埋藏跡 (EU 16)
 9—5a・5b号埋藏跡 (EU 5a・5b)
 10—15号埋藏跡 (EU 15)

2 遺物

土器

出土した土器は、整理箱で約70箱を数える。埋設土器以外は、大半が破片であり、分類にあたっては、主として文様描出技法及び文様別に類型化を行なった。また、取り扱った土器は、殆んどが遺構内出土のものである。

1類 隆帯により文様を描出する土器群

1a類 (第18図1~3・15・18 第19図1 第20図14・20 第21図1・16・32 第22図17・30・33 第24図8・9・14・16)

キャリバー形を呈する深鉢が主体となる一群で、口縁部に隆帯による渦巻文を描出し、それをはさむように梢円形のモチーフを区画する。各文様は隆帯の側縁を沈線で調整し、磨きを加えて、立体的な磨消繩文を構成する。

口縁部破片をみる限りでは、比較的厚手に整形するものと薄手なものとに分けられる。前者は、渦巻の部分が突起状に張り出し、彫りの深いモチーフを呈する(第18図3)。後者は、各モチーフがレリーフ状に描かれ、隆帯の幅も狭くなる傾向を示す。また渦巻文も円文に省略化するもの(第24図8)や、沈線を施して文様を描出するもの(第19図1 第20図20 第24図14・16)等がみとめられる。

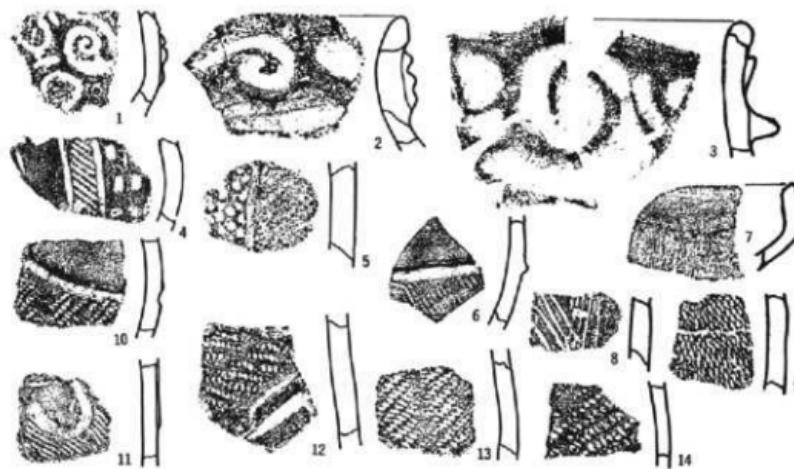
体部文様は、破片のため全体については不明であるが、沈線による曲線文様を施すもの(第19図1)、斜繩文の地文のみのもの(第24図16)等がある。

地文は、L R・R L 単節繩文で、口縁部の区画内には、刺突文を施すもの(第18図1 第19図1)もみとめられる。

1b類 (第18図16・27~30 第19図2 第20図12 第21図2・3・31 第22図19 第23図1・16・21 第24図11・13・22・23)

口縁部が平縁ないし波状を呈し、体部から外反ないし直線的に立上る深鉢を呈する。そのため前類に比して、口縁部文様帶と体部文様帶との区分が行なわれない特徴をもつ。ただし、(第18図30)は口縁部の梢円形のモチーフが、横に展開し体部とのモチーフと一線を画する感を残している。

文様は、口縁部に隆帯による幅広い無文部を形成し、波状下部に円孔を有するもの(第23図21)もみられる。そこから延長して渦巻・梢円及び円形のモチーフが垂下し、体部文様を縦に区画する。各モチーフは、隆帯と沈線との組み合わせで描出される。隆帯は、器面からの盛り上がりが浅く、丁寧な磨きが施されてレリーフ状の磨消繩文を呈する。沈線は、棒状工具による太い沈線で、深く明瞭に施文される。地文は、縦位ないし斜位方向からの廻転による単節斜繩文を主体とするが、一部撚糸圧痕もみとめられる(第18図30)。



第18図 土器拓影図 (1) ST 1a・F 1-1~9 ST 2・F 1-15~24
ST 1a・F 2-10~14 ST 2・F 2-25~30

2類 粘土紐による隆線文を主体とする土器群

2a類 (第18図12 第19図27 第20図26 第21図18 第22図10・33 第23図13～15・18・24・26 第24図3・13)

器面に粘土紐を貼付し、さらにその両側縁に沈線を施してモチーフを展開する。本来は、前類土器群の体部文様を構成すると思われるが、文様手法の特徴として類別を行なった。文様は、破片のため詳細は不明であるが、橢円ないし渦巻文の隆線が口縁部から縦に連結するものと推定される。隆線は、太く、沈線による調整に磨きを伴うもの（第20図26）もみとめられ、口縁部からのびる隆帶による磨消繩文に伴う可能性を示す。

地文は、単節斜繩文が主体を占め、隆帶及び沈線よりも前に施文されたことが、各条と文様との切り合いで把握される。

器形は、大半が深鉢で、直線的に開くもの他に、体部中央部から外反するもの（第20図26）や、内湾して口径が体部より小さく胴膨みを呈するもの（第24図11）等がある。

2b類 (第18図6・10・11 第19図7・9・10 第20図1～4 第22図1～4・26・27 第23図2・3・5～8・17・22・23 第24図19・25 第25図2・10)

隆線に研磨調整を施して、稜を形成するもの。2本の稜線で文様を描出する場合が多く、そのため両側縁の盛り上った無文隆帶による区画文様を示す。区画内には、充填繩文が施され、浮彫りされた磨消繩文を描出する。

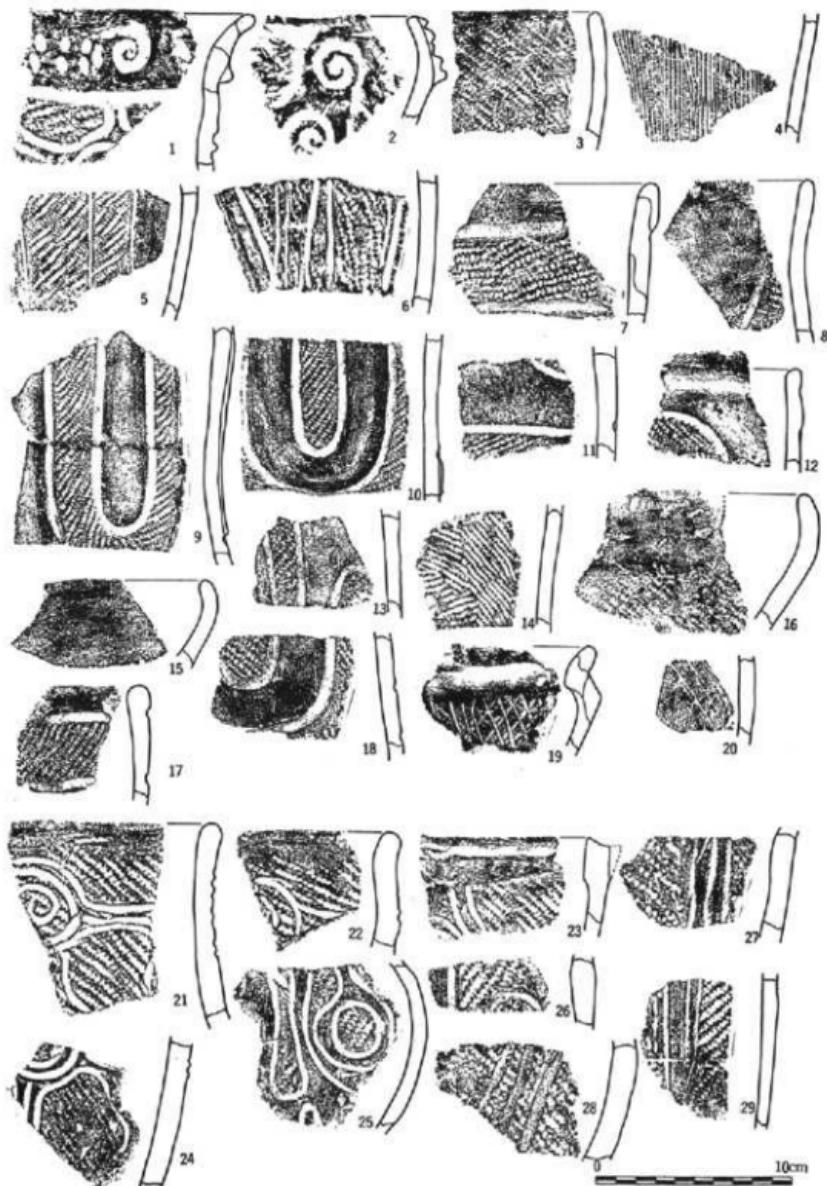
文様は、S字・C字状のモチーフが縦ないし横にめぐるもの（第19図7・10 第23図2・3・5）、渦巻状のもの（第20図2 第24図19 第25図2）、口縁下部から鱗状に垂下する曲線文様を描くもの（第22図2・4 第24図25）等がみられる。これらの文様の全体構成は不明であるが、（第23図10）では隆線によって体部下半に対する文様帶区画が行なわれている。また器形的にみても、前二者の文様をもつものは、頸部からゆるく外反する平縁の深鉢、後者は逆くの字形に内湾する浅鉢と器形による違いがみとめられる。

地文は、LR・RL単節斜繩文でモチーフに沿って施文を行なっている。

3類 沈線文を主体とする土器群

3a類 (第18図20 第19図21～23・28 第20図11・15・22・25 第21図19・34 第22図21 第23図20 第24図10・15・17)

口縁部に幅約1cmの無文部をめぐらす以外は、繩文地文に沈線文を施す土器群である。文様には、磨消しが加えられず口縁部から渦巻文が描出され、それを2～3本の沈線で連結するもの（第19図21～23）や波状口縁、波頂下部の渦巻文から沈線が垂下するもの（第24図10・17）、縦に走る沈線に刺突による列点を加えるもの（第20図15・22 第22図21 第23図20）がみとめられる。



第19図 土器拓影図 (2) ST 2 · F 2-1~6
ST 3 · F 1-7~15 EP 17-16·18 ST 4 · F 2-20~29
EP 21-17·19

器形は、体部中央から外反する深鉢と、やや小形で波状口縁が外反する深鉢とに分けられる。口縁部は一部に肥厚するもの（第19図23）もみられるが、全体に薄手の平縁を呈するものが多い。

地文は、複節の場合（第24図17）もみとめられるが、大半が単節斜繩文で縦位ないし斜位方向からの施文である。

3 b 類（第19図5・6・29 第20図24 第21図4 第23図19 第24図1・2・12・28）

体部を直線的に垂下する沈線文を特徴とする。殆んど体部破片のため、器上部の文様構成は不明である。各沈線間は、繩文が充填されて磨消繩文を呈する。ただし（第19図6・第24図28）では、沈線施文後に粗い磨消しが行なわれ、順序が逆になっている。沈線は、前類に比べて細く浅目に引かれる傾向を示すが、刺突文を加える場合（第19図29）など全体に類似点が多い。

地文は、単節斜繩文が主体を占め、モチーフに沿って規則的に施文されている。

3 C 類（第18図19 第19図24～26 第21図14・17・20 第22図14・34）

地文の上に渦巻・梢円文等の曲線文様が描かれ、沈線間は磨消しが施される土器群。一般に沈線は細くめぐらされ、器形も比較的小形の深鉢が多い。文様構成は、出土量が少なく、また体部破片のため器全体については不明であるが、（第19図25）では大きく内湾する体部に、円文を中心に細長い曲線文様が展開し、無文帯の幅も狭まっている。また（第18図19）のように、渦巻を描く沈線間に刺突を加えるものもみとめられるなど、全体に文様手法においては前類と共通性がある。

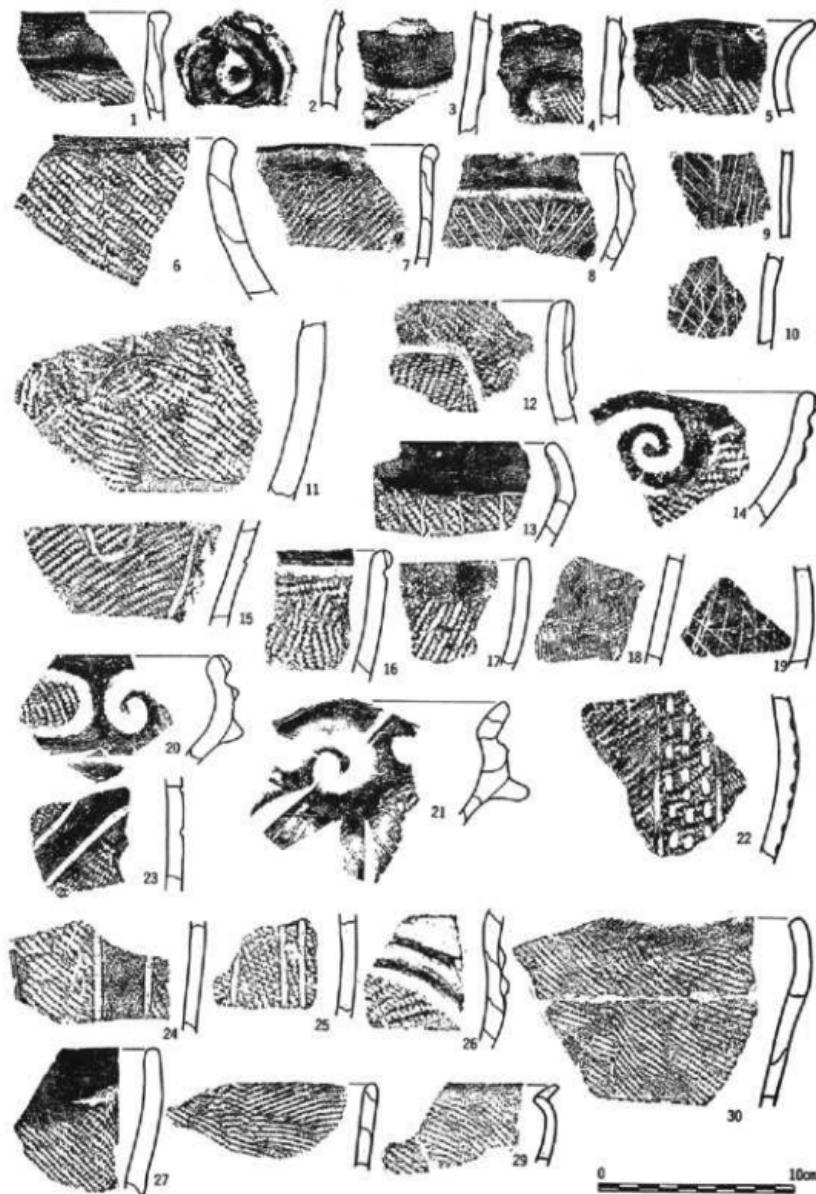
地文は、LRとRLの場合があるが、出土数ではLR繩文が多いようである。

3 d 類（第18図4・5 第19図7・8・11～13・15・17・18 第20図23 第21図5～13・21～24・26・27・30・35～39 第22図6～9・12・16・18・22～25 第23図4・9・11 第24図5・20・21・26 第25図1・3・6・8）

器面にS字・C字状の沈線文を縦ないし横位に区画する土器群。沈線は、太く、断面が凹線状を示す。区画内には、繩文が充填されて磨消繩文を描出する。また沈線に沿って、円文・列点などの刺突を施す場合もみとめられる（第18図4・5 第22図22 第24図26）。

文様構成は、主として体部上半に展開し、下半部は沈線によって区画され地文ないし無文を呈する（第19図11 第21図13）。器面全体は、よく研磨されて文様を区画する無文部を形成するが、中には陰帶状に盛り上げて浮彫り的に仕上げている場合（第19図12・17・18）がある。この手法は、平滑な器面に文様を展開する本類の特徴と若干異なり、2bに類似するが、稜線を作らず断面が平坦を呈しており、本類に含めることにした。

器形は、頸部が若干縮り口縁部にかけてゆるく外反する深鉢で、口縁部は比較的薄手で



第20図 土器拓影図 (3) ST 4・F 2-1~11 ST 5・F 2-13~18 ST 5・Y-24~30
ST 4・F 3-12 ST 5・F 3-19~23

無文を呈し、平縁が多い。

地文は、単節斜縄文でLR縄文が多く用いられている。

3 e 類 (第22図32)

体部下半が膨み、頸部で締り、口縁部が直線的に立上る深鉢である。文様は頸部に沈線で横円形の区画及び渦巻文が描出され、同文様は二条の平行沈線で体部下半と区画される。沈線は、地文の上に施され、磨消行為は不明瞭である。出土量は少なく、1点のみである。

4 類 穓ないし櫛齒状工具により条線を描出する土器群

4 a 類 (第18図7・22 第19図4 第20図18 第22図5・20 第25図4・11)

細い条線で、刷け目状を呈する。器形は、逆くの字形に内湾する深鉢で、口縁部は平縁で1~2cm幅の無文部を形成する。

4 b 類 (第18図8・23 第19図19・20 第20図10・19・21 第21図15 第22図31 第24図24 第25図5・7)

前類よりも目の粗い条線で、直線・格子目・綾杉状文を呈する。器形は、比較的小形の深鉢ないし浅鉢が多い。口縁部は、無文の隆帯(第20図8)や渦巻文・凹線文などを施したぶ厚い隆帯を形成し、くの字形に外反して肩の張るもの(第19図19 第20図21 第22図31)や内湾する(第20図8)器形を示す。

4 c 類 (第20図13)

1点のみの出土で、縄文地文に幅約1cmの間隔で直線的に条線を垂下する土器である。条線は、細く、浅目に施文されている。器形は、口縁部が平縁で内湾する深鉢で、口縁下約2cmの幅に無文帯をめぐらす。

5 類 撥糸地文の粗製土器群 (第18図9 第22図28 第24図7)

殆どが、粗製深鉢で条の密なもの(第18図 第24図7)と粗いもの(第22図28)に分けられる。縄文地文のものと比べて、出土量は少ない。

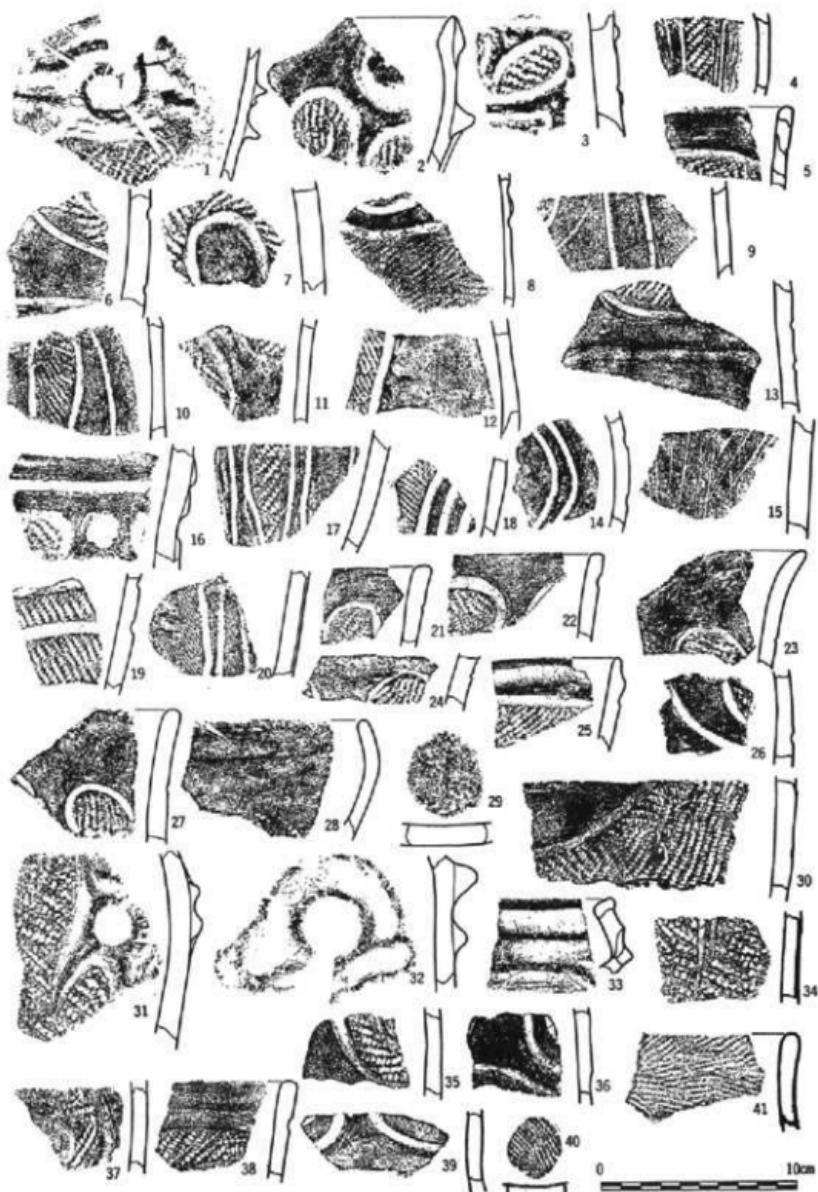
b 類 縄文地文の粗製土器群 (第18図13・14・17・21・24 第19図3・14・16 第20図5~7・15~17・27~30 第21図41 第22図11・15・29 第23図12・17 第24図6・18 第25図9)

粗製深鉢が中心で、円筒形を呈するものや口縁部が内湾及び外反するものとに分けられる。また口縁部に無文帯を形成するものには、沈線ないし隆帯で区画を行なうものがある。口縁部形態は、大半が平縁であるが小波状を呈するもの(第20図30)も若干みとめられる。

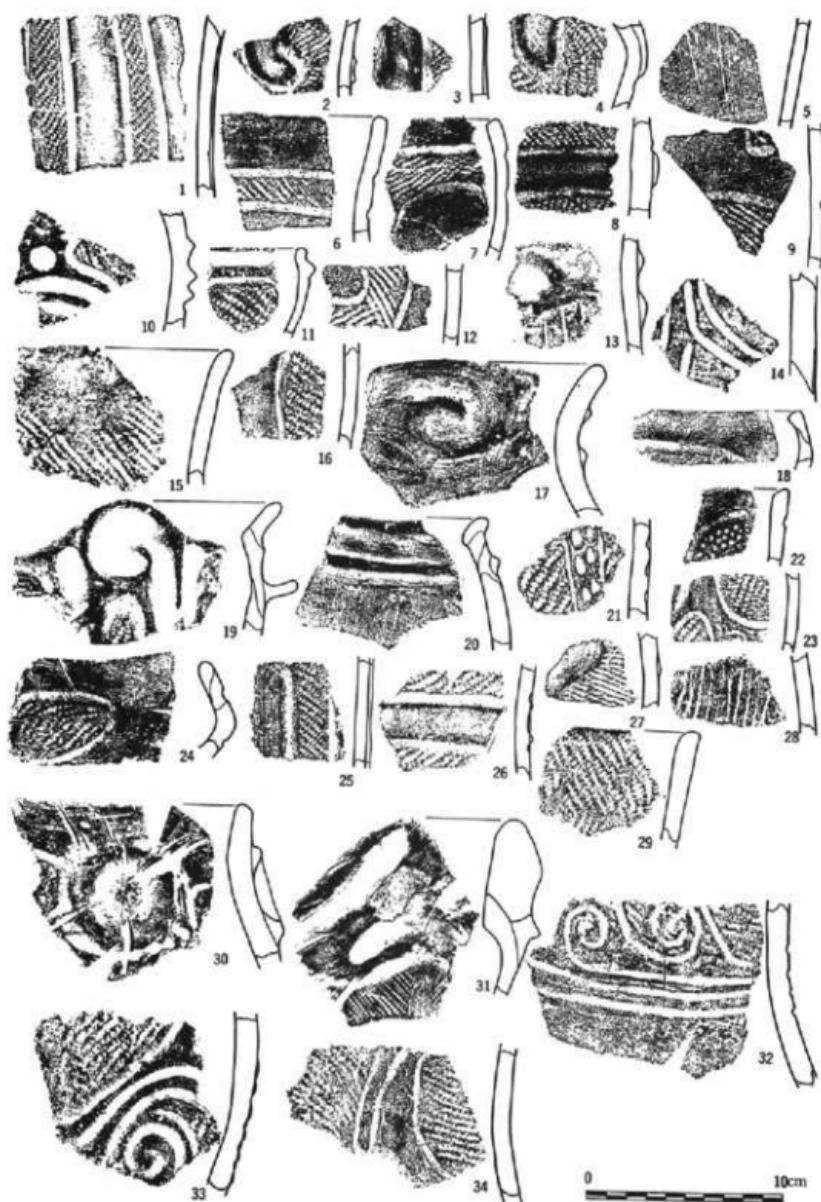
地文は、LR・RLの単節斜縄文が中心である。

円盤形土製品 (第18図26 第20図29・40 第24図29)

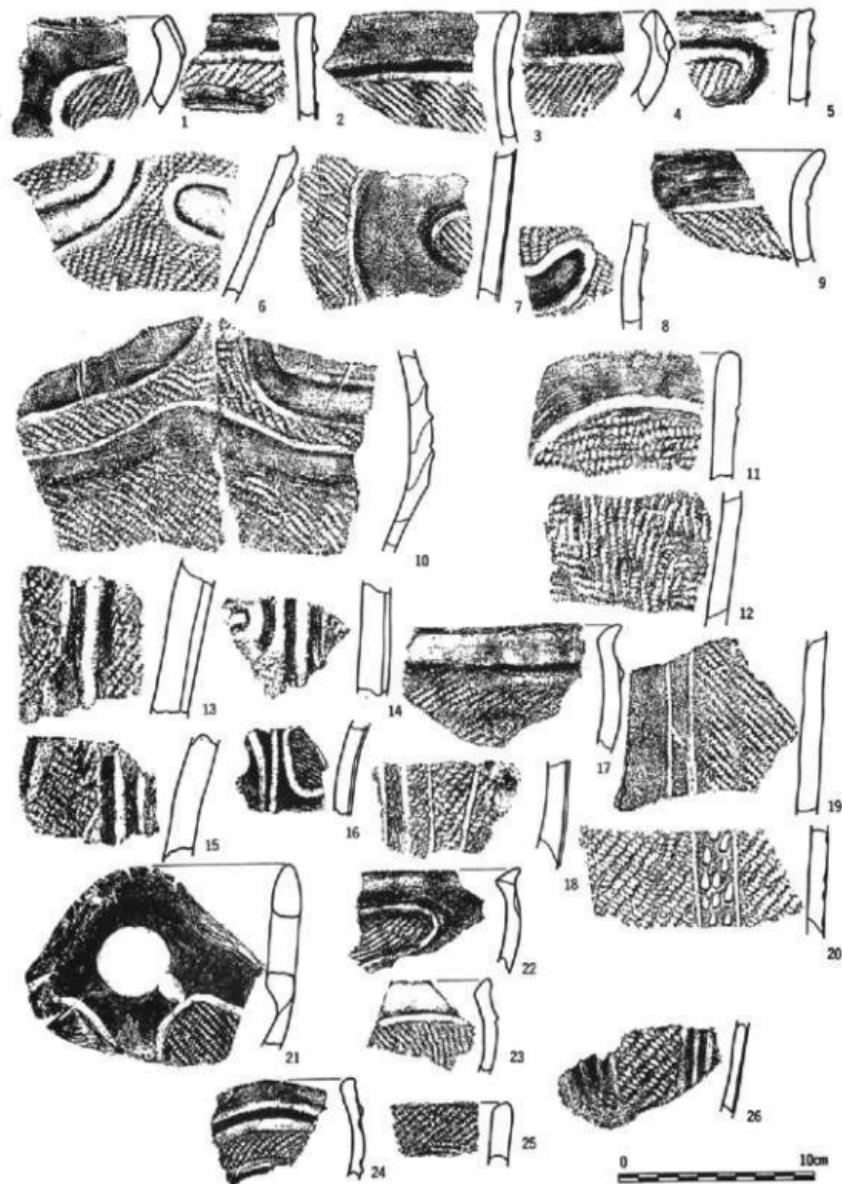
土器片の周囲を打ち欠いたり、磨いて作っている。直径3~4cmを測る。5点出土。



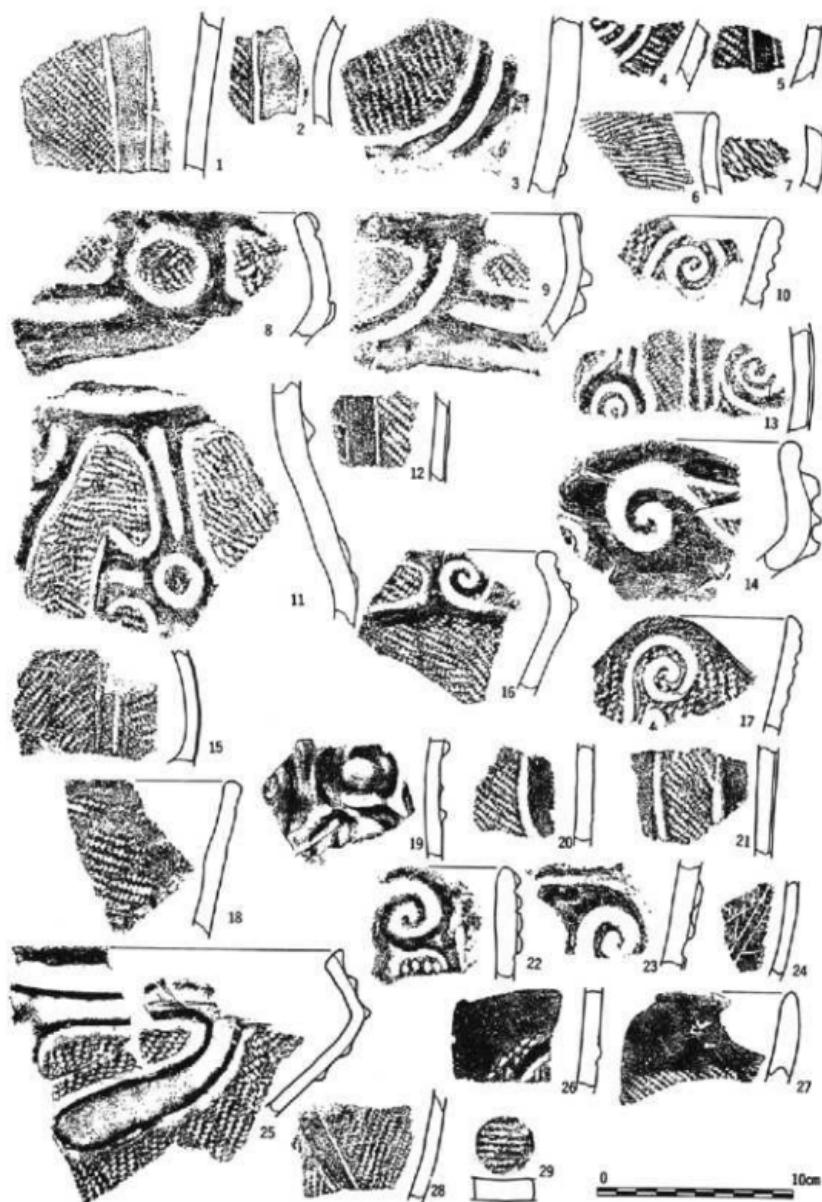
第21図 土器拓影図 (4) ST 5・F 1-1~15 ST 6・Y 26~29 ST 7・F 1-31~41
ST 6・F 2-16~25 ST 6・E P 2-30



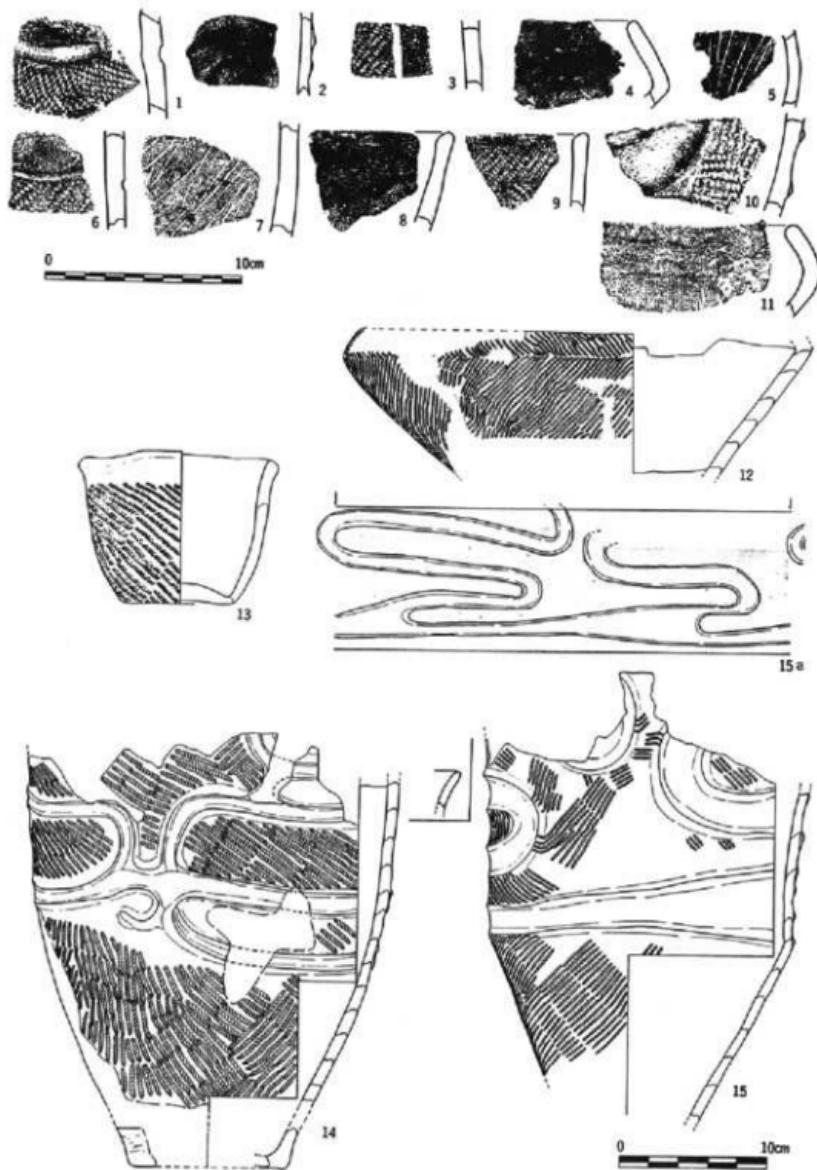
第22図 土器拓影図 (5) ST7・F1-1~5 ST8・F1-10~12 ST9・F1-17~29
ST7・EP217-6~9 ST8・F2-13~16 ST9・F2-30~34



第23図 土器拓影図 (6) ST 9・F 2-1~12 E L 39-25
ST 9・F 3-13~23 E L 40-24-26



第24図 土器拓影図 (7) ST 9b・Y-1・2
SM11-3~7 SK21・F 1-8~13 SK22-18~21
SK21・F 3-14~17 SK23-22~29



第25図 土器拓影図(8)・土器実測図(1)

SK24-1~5 ST6·EL6a-12

SK26-6~9 SK21·F1-13

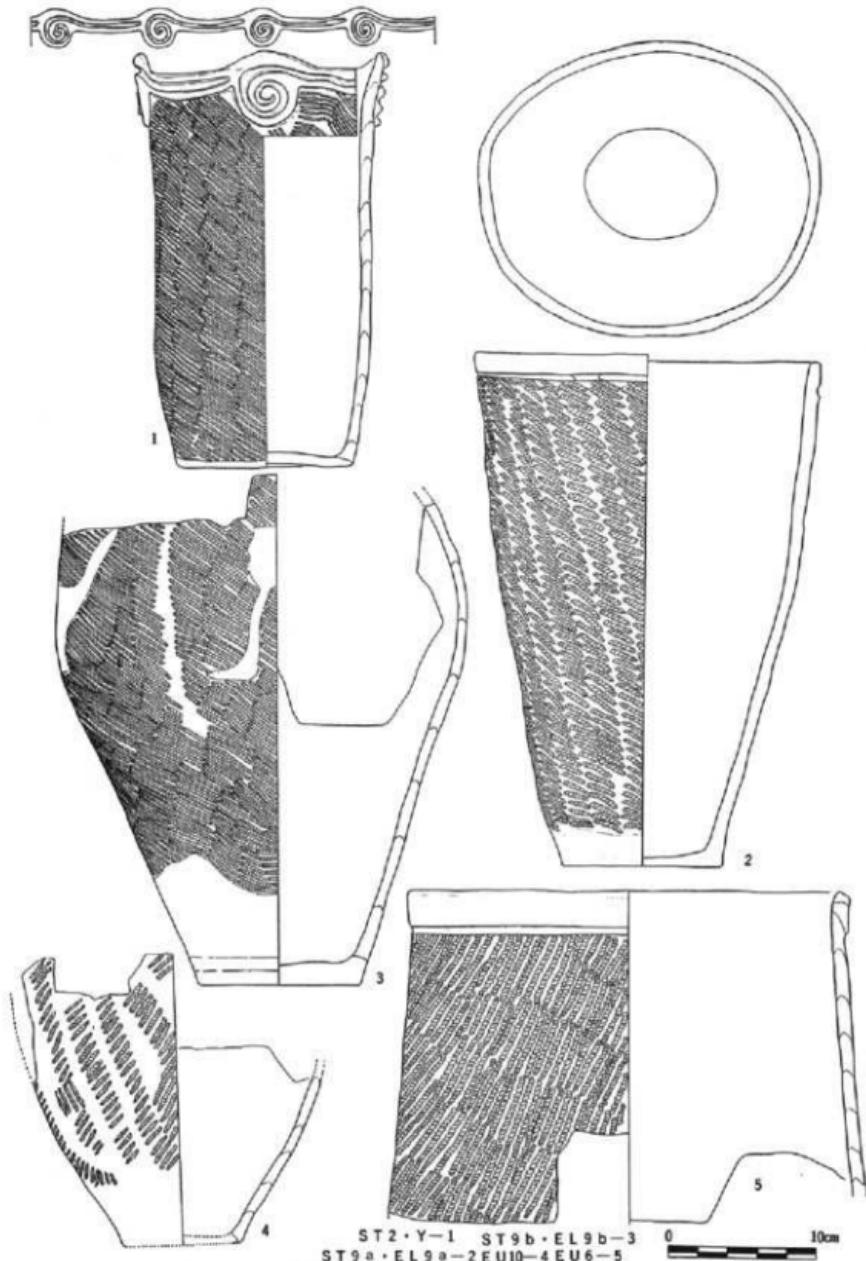
SK27-10·11 EU12-14

ST8a·EL8a-15

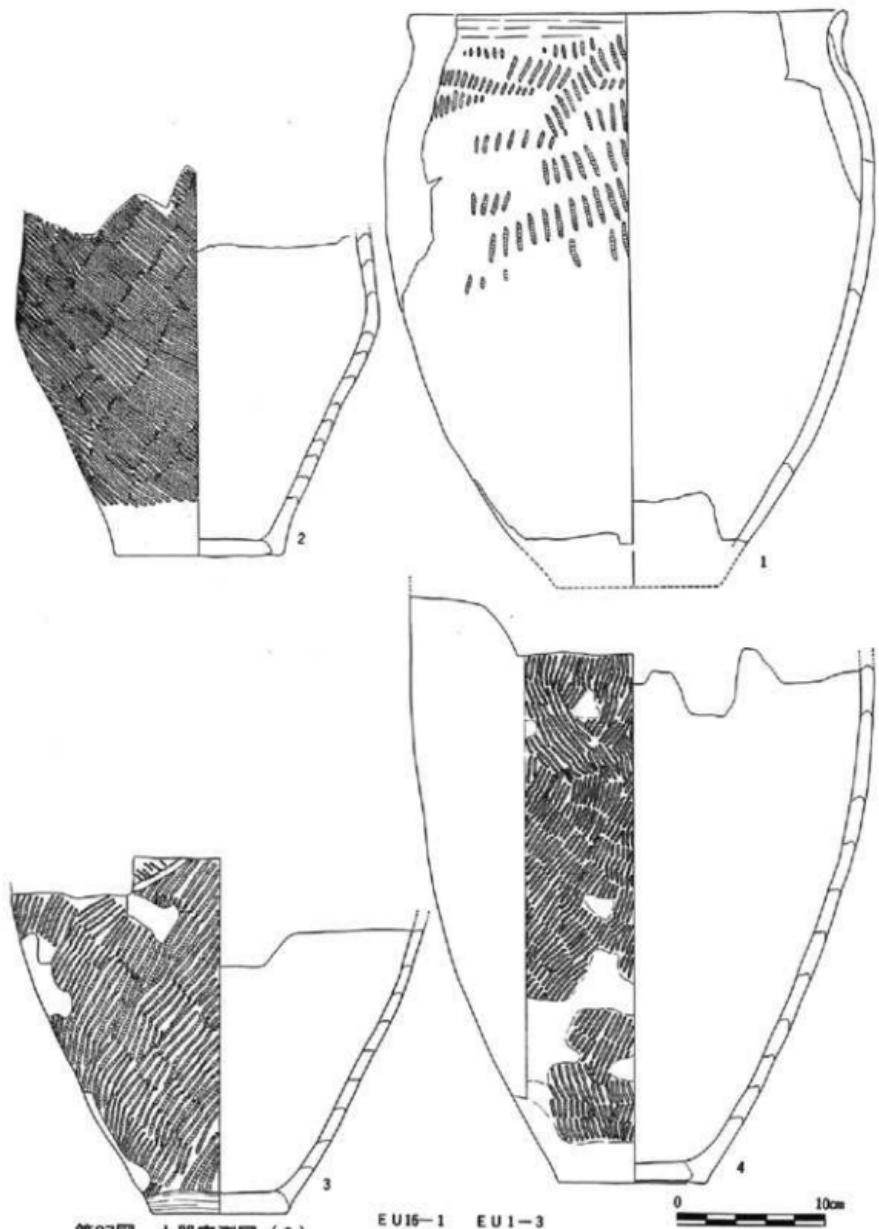
表1 完形土器分類表

辨別番号	器 形	計 測 値 (cm)					口縁部(頂部)	体 部	胎 土	燒成	出土地区	時 期
		口 径	最大径	底 径	器 高	器 厚						
第25回 12	浅 鉢	(29.2)	32		(9.5)	0.9	平縁で大きく内溝する。文様は、圓文地文とR Lのみで、横文帯を施す。	直縁状に開き、肩部から同様体で斜位方向に綴文を施し羽状を示す。	砂粒・雲母を少量含む。	良好	S T 6 · E L 6 n	大木10
第25回 13	深 鉢 (小鉢)	13.6	13.6	7.4	10.6	0.7	若干凸凹を呈する平縁で、やや外反して立てる。幅約1cmの無文帯を持つ。	ほぼ直立気味に開く。文様は、無筋しR L圓文地文のみである。	砂粒を多量に含み、雲母を少量含む。	良好	S K 21 · F 1	大木10
第25回 14	深 鉢		(25.4)	(10.5)	(30)	0.8	頭部から若干外反し、平縁である。綴文が内側に施す横縁の横内文様を描く。	綴縁により区画される。	粒子の細い、砂粒を含む。	良好	E U 12	大木10
第25回 15	深 鉢	(23.2)	(23.2)		(27.6)	0.6	頭部で少しきれい、外反する。無文の載縁による曲線文様を描画する。	綴縁により区画される。R Lの圓文地文のみである。	砂粒を多量・雲母を少量含む。砂粒は若干大粒である。	良好	S T 8 a · E L 8 n	大木10
第26回 1	深 鉢	16.5	16.5	12	27	0.7	4単位の波状下部に、縦帶による溝巻文を施し、沈縁で横に選透を行なう。	円筒形を呈し、底部附近までLR斜綴文を、綴位方向に施文する。	砂粒・雲母を少量含む。	良好	S T 2 · Y	大木9
第26回 2	深 鉢	23.6	23.6	11	35.5	0.7	ほぼ直立し、一条の沈縁をめぐらし、周縁による無文帯を区画する。	直縁的に開き、R L斜綴文を斜位方向から施文する。	粒子の細い砂粒及び雲母を含む。	良好	S T 9 a · E L 9 a	大木10
第26回 3	深 鉢		28	11	(35.1)	0.8		上半部で大きく内溝する。LR斜綴文を綴位方向から施文する。	砂粒・雲母を少量含む。	良好	S T 9 b · E L 9 b	大木9
第26回 4	深 鉢		(22.6)	(8)	(20)	0.7		ほぼ直線的に立ち上る。底部から約5cmの高さまでR L斜綴文を施す。	砂粒を多量・雲母を少量含む。	良好	E U 10	大木10
第26回 5	深 鉢	30.4	(33)		(23)	0.9	ほぼ直立する。一条の沈縁で区画された、陸帯状の無文帯をめぐらす。	綴縁のみで、R L斜綴文を斜位方向から施文する。	砂粒を多量・小石・雲母を少量含む。	良好	E U 6	大木10
第27回 1	深 鉢	(30.2)	(33.6)	(11)	(36.5)	1	平縁で、若干外反する。約2cm幅に粗い磨消を行なっている。	綴縁のみで、体部上半に最大径をもつ。地文を粗く磨消している。	砂粒を多量・雲母を少量含む。	良好	E U 16	大木9
第27回 2	深 鉢		24.8	11.5	(26.5)	0.8		下半部から少しきれいで外反する。地文は、LR斜綴文である。	砂粒を多量・雲母を少量含む。	良好	E U 8	大木10
第27回 3	深 鉢		28.6	9	(24.5)	0.8		若干溝巻しながら立ち上り、上半に沈縁文を施す。地文は、R L。	砂粒を多量・雲母を少量含む。	良好	E U 1	大木10
第27回 4	深 鉢		32	10.2	(40)	1		下半から直線的に立ち上り、中央上部で若干内溝する。地文は、R L。	多量の砂粒・雲母を含む。	良好	E U 4	大木10

※ () は、推定数値及び現存器高を示す。



第26図 土器実測図 (2)



第27図 土器実測図 (3)

EU16-1 EU1-3
EU8-2 EU4-4

石 器

今回の調査で出土した石器は、整理箱で約5箱を数える。器種別に石鎌・石錐・石匙・鍔状石器・搔器・削器・磨製石斧・凹石・磨石・石皿・砥石・石棒・耳飾・垂飾品に分けられる。石質については、打製石器は頁岩が主体を占め、他に玉髓・黒曜石・チャート等が用いられている。また磨製石器では砂岩・安山岩・花崗岩・蛇紋岩等を素材としている。本文では、主として遺構内出土のものについて取り扱うこととする。

石 鎌 (第28図1~9 図版15)

形態において、7分類できる。24点出土。

- a 二等辺三角形を呈し、抉りを持たず基部及び側縁部が直線的に成形されるもの(3・4)。
- b 二等辺三角形を呈し、基部に浅い抉りを持つもの(1・2)。
- c 二等辺三角形を呈し、基部にやや深い抉りを持つもの(7)。
- d 脚部が丸く調整され、基部にU字状の抉りを持ち、ハート形の外形を示す(8)。
- e dに類似する形態を示すが、抉りが浅い。半製品か。
- f 二等辺三角形を呈し、基部が若干舌状に張り出すもの(5)。
- g 菱形を呈し、基部の作出が明瞭でないもの(6)。

石 锥 (第28図10~15 第29図8 図版15)

刃部形態により、4分類できる。13点出土。

- a 全体に小形で、刃部が細長く針状に成形されるもの(10)。
- b 刃片の先端に1~1.5cmの長さで、やや太めの刃部を作るもの(11・12・15)。
- c 棒状を呈し、先端に太い刃部を形成する。器体と刃部との境が、明瞭でない(13)。
- d 台形状の幅広い刃片の側縁部に、ピック状の刃部を作出するもの(14・第29図8)。

石 匙 (第28図16~19 図版15)

全て縦形石匙で、4点出土。刃部及びつまみの形態で4分類できる。

- a 小形で丸味のある器体先端部に、短く直線的な刃部を持つもの(16)。
- b 刃部に対してつまみ部が小さく、直線的な切り出し状の刃部を持つもの(19)。
- c 幅広で丸味のある刃部を作るもの(18)。
- d つまみが大きく、尖頭器状の鋭い先端部を作るもの(19)。

鍔状石器 (第28図20・21・22 図版15)

形態により2分類できる。5点出土。

- a 刃部が両面加工により、直線的に仕上げられ、撥形の形態を示す。大形で刃部の角度が大きいもの(22)と、やや小形で薄手の器体に鋭角な刃部を持つもの(20・21)とに分けられる。

b 側縁がほぼ平行に走る短冊形を示すもの。背面が高く身の厚い石器で、断面は凸レンズ状を呈する。

搔 器 (第28図24~27 第29図 1~5・10 図版15)

剥片の先端ないし周囲に剥離を加え、刃部を形成する一群。一般に不定形な剥片を用いているが、刃部及び形態により3分類できる。18点出土。

a 小形で木葉形を呈し、両面とも入念に剥離が施され、鋭角な刃部を形成する (26)。

b 縦長剥片の側縁から先端にかけて剥離を加える一群。殆ど片面加工である (4) は、基部にピッチ痕を残す。刃部の角度は、比較的大きい (24・25・27 1~5)。

c 横剥離の背面周縁部に剥離を加え、鋭角な刃部を形成する (10)。

削 器 (第28図23 第29図 6・7・9 図版15)

縦長剥片の側縁部に刃部を形成し、殆ど片面加工によるものである。15点出土。

a 縦長剥片の両側縁ないし側縁部に刃部を持つもの (23・6・7)。

b 幅広い剥片の基部から側縁部にかけて、浅い剥離を加え刃部を作るもの (9)。

磨製石斧 (第30図 1~7 図版15)

6点出土。殆ど長さが10cm前後で、丁寧に面取りされた定角式のものである。ただし、(1)は擦り切り技法で成形され、(6)は他に比して大形で身の厚い石斧である。

四 石 (第30図 7・8 図版16)

円形ないし梢円形のものと棒状のものがあり両面に1~3個の凹みをもつ。11点出土。

磨 石 (第30図 9 図版16)

円形・梢円形・長梢円形を呈し、両面ないし片面に磨面を持つ。55点出土。

石 盆 (第30図 10 図版16)

不整な四角形ないし梢円形を呈し、表面に擦られた凹面を持つ。8点出土。

砥 石 (第30図 11)

棒状の河原石を素材としている。両面に溝状に走る凹部を持つ。凹部は、磨減により平滑を呈する。1点出土。

石 棒 (第30図 12 図版14)

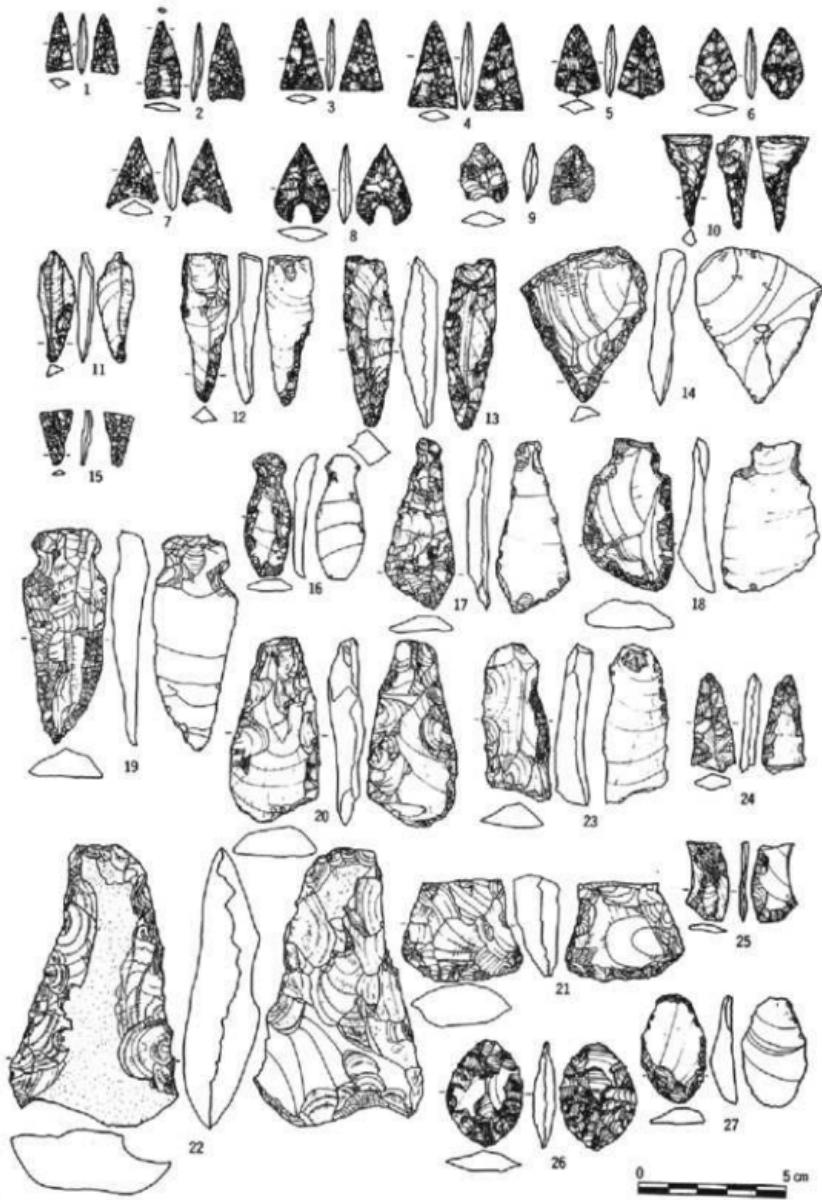
1点出土。全長54.6cm・頭部径9.6cm・胴部径12.6cmを測る、単頭の石棒である。

耳 飾 (第29図 11 図版15)

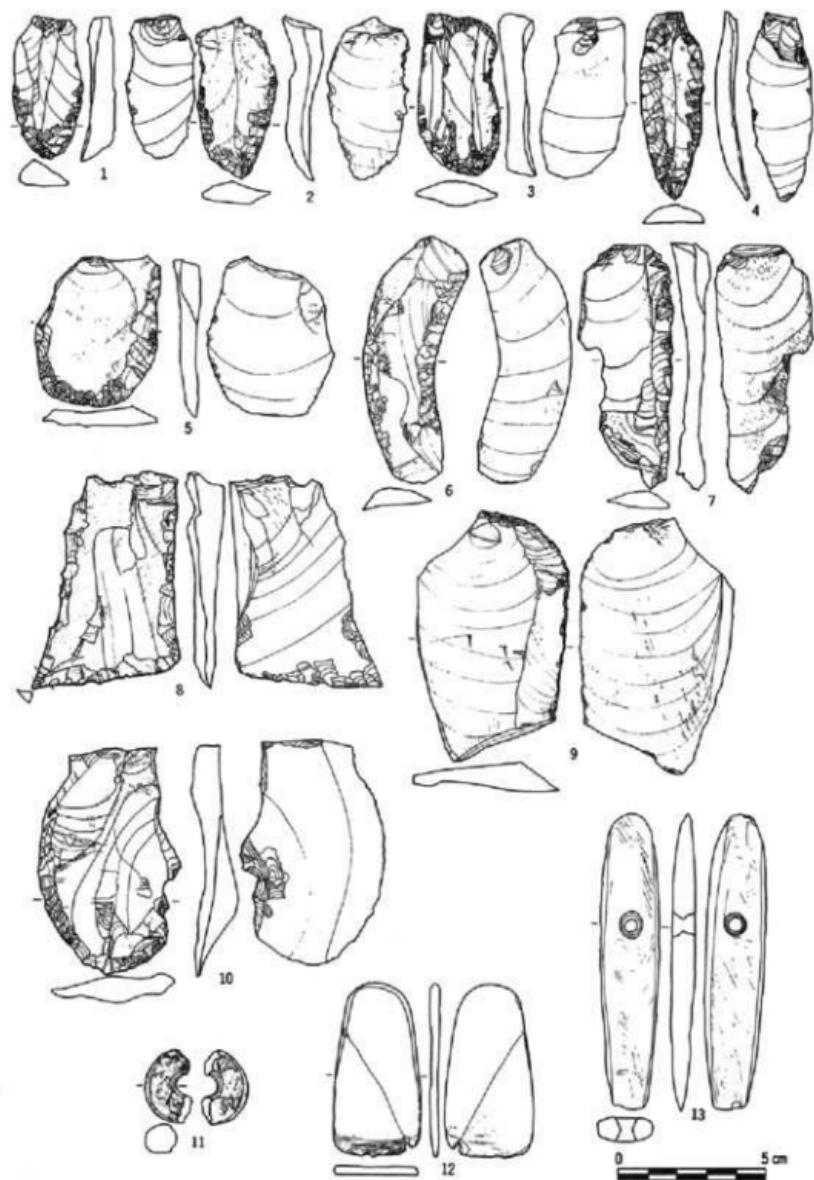
円形を呈し、中央が両面から穿孔された玦状耳飾と考えられる。1点のみ出土。

垂飾品 (第29図 12・13 図版15)

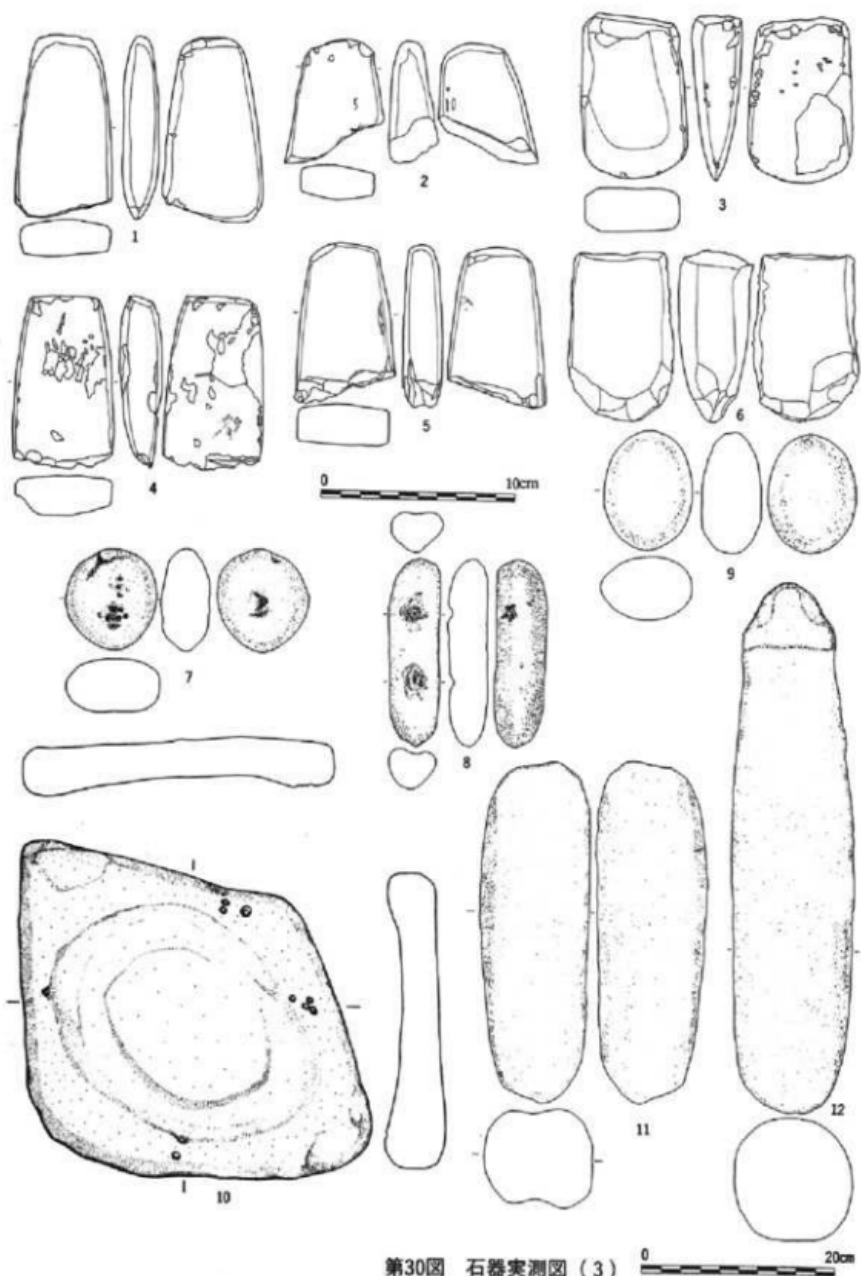
2点出土。(12)は小形の石斧状を呈し、身の薄い板状のものである。(13)は、細身で両端とも刃部状に成形され、胴部中央上部に両面から穿孔されている。



第28図 石器実測図（1）



第29図 石器実測図（2）



第30図 石器実測図 (3)

V まとめ

- 1 本遺跡は、横川と荒川の合流点、赤芝の東方400mの段丘上に立地している。
- 2 調査により竪穴住居跡、土壙、集石遺構、土器埋設土壙（埋甕跡）が検出され、縄文時代中期後葉から末葉に属する集落跡である事が明らかになった。
- 3 発見された遺物には、縄文土器、円盤状土製品、石器等がある。土器は、大きく分けて、縄文時代中期後葉（大木9式併行）のものと、縄文時代中期末葉（大木10式併行）のものとがある。石器は、石鐵・石匙・石錐・石範・搔器・削器等の剝片石器と、磨製石斧・凹石・石皿・磨石・砥石等で構成される。量的には磨石・凹石・搔削器・石鐵の順に多く、石匙・石範等が少ない。その他、垂飾品が3点出土し、（第29図13）は、EU2とST6のEL6bから出土した接合資料である。
- 4 ST2覆土5a層およびSK22の覆土2層から多量の炭化クリを検出した。クリは、表皮がすべてむかれている。その他、クルミ、ドングリ等堅果類種子の炭化物若干を認める。
- 5 住居跡は、切り合い等も含めて精査区（西区）に14棟が集中して検出された。各切り合いは以下の4例である。ST1b→ST1a、ST1b→ST8b→ST8a、ST7a・7b→ST4b→ST4a→ST5、ST9b→ST9a。住居と土壙では、ST6→SK23、EU16→ST2の2例がある。改築を示す住居跡は、EL6b→EL6aの関係の認められるST6がある。炉跡の左右に配される主柱穴も炉跡の移動と同時に移築されているのが判る。
- 6 各住居跡は、石囲炉、複式炉、地床炉（石囲いが抜き取られた可能性が強い。）等を持つ。複式炉を持つ住居跡は、ST1a・1b・6・8・9aの5棟があり、石囲炉と認められるものにST2・3の2棟がある。他は、焼土部分に若干の掘り込みを認めるが、石組等の遺存がなく不明である。各住居跡の時期は、丹羽茂氏の編年を基本とすれば、大木9a式期に属するST2・3・7a・7b・4b・4a・9b、大木9b式期に属するST5、大木10a式期に属するST6・1a・8b、大木10b式期に属するST1b・8a・9aと考えられる。
- 7 精査南区を中心に埋甕跡を13基検出した。埋設土器は、縄文地文のみの粗製土器が大半で、その時期の判別は困難である。器形や出土状況からみて、EU16を除いては大木10式期の所産と考えられる。土器埋設の状況は、正位のものEU1・2・4・5b・9・12・13・15の8基、逆位のものEU6・3・5a・14・16の5基がある。
- 8 その他の遺構では土壙6基、集石遺構1基が検出された。

註-1 桜倉亮吉（1964）「朝日遺塚」山形県自然環境学術調査会

註-2 地理文夫（1964）「新日山地の地形「朝日遺塚」山形県自然環境学術調査会

註-3 丹羽茂氏（1973）「野田遺跡調査報告」宮城県文化財調査報告書第29集

註-4 丹羽茂氏（1971）「東北地方南部における中期縄文時代中・後葉土器群研究の現段階一特にその年代的編成に關して」『福島考古』第12号



遠景（東から）



遠景（南から）



遠景（北から）



西区発掘風景（東から）



南区発掘風景



西区発掘風景（南西から）



遺物出土状况



土層断面



ST1a-EL1a



ST1b-EL1b

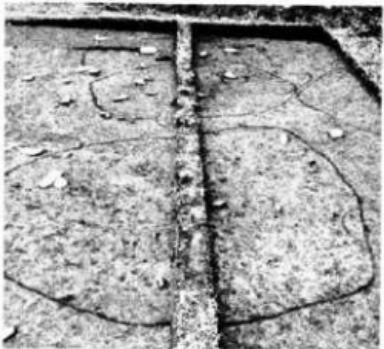


檢出狀況

圖版2 ST1a-1b



ST1a-RQIII出土狀況



検出状況



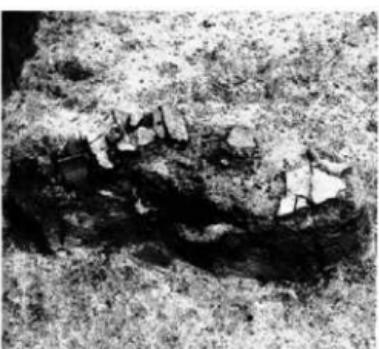
遺物出土状況



土器出土状況



遺物出土状況



炭化クリ出土状況



S T 2 • E U 16 検出状況



土层断面(1)



土层断面(2)



EL 2 检出状况



土层断面(3)



EL 2 全景



完掘状况

图版 4 S T 2(2)



ST 4a-4b 遗物出土状况



ST 5 遗物出土状况



ST 4a 床面勘查状况



ST 5 床面勘查状况



ST 4a 完成状况



ST 5 完成状况

四
九
三
一





遗物出土状况(1)



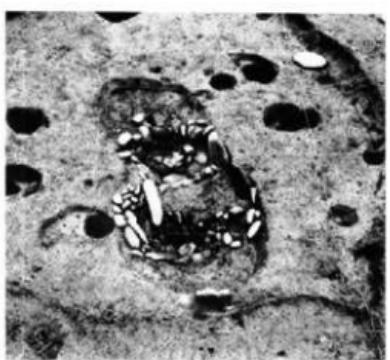
遗物出土状况(2)



E L 6 a 横出状况



E L 6 a 土层断面



E L 6 a + 6 b 完掘状况



完掘状况



ST 8a - 8b 土层断面



ST 9a - 9b 遗物出土状况



ST 8a - 8b 检出状况



ST 9a - 9b 检出状况



ST 8a - EL 8b 全景

图版8 ST 8a - 8b · 9a - 9b



ST 9a - EL 9a 土层断面



SK 23 检出状况



SK 23 土层断面



SK 22 土层断面



SK 26 检出状况



SK 21 土层断面



SM 11 检出状况

图版 9 土块、焦石遗物



南区·埋甕跡群



E U 5 a + 5 b



E U 3



E U 4



E U 13



E U 12

图版10 埋甕跡(1)



E U 1(1)



E U 1(2)



E U 2



E U 8



E U 15

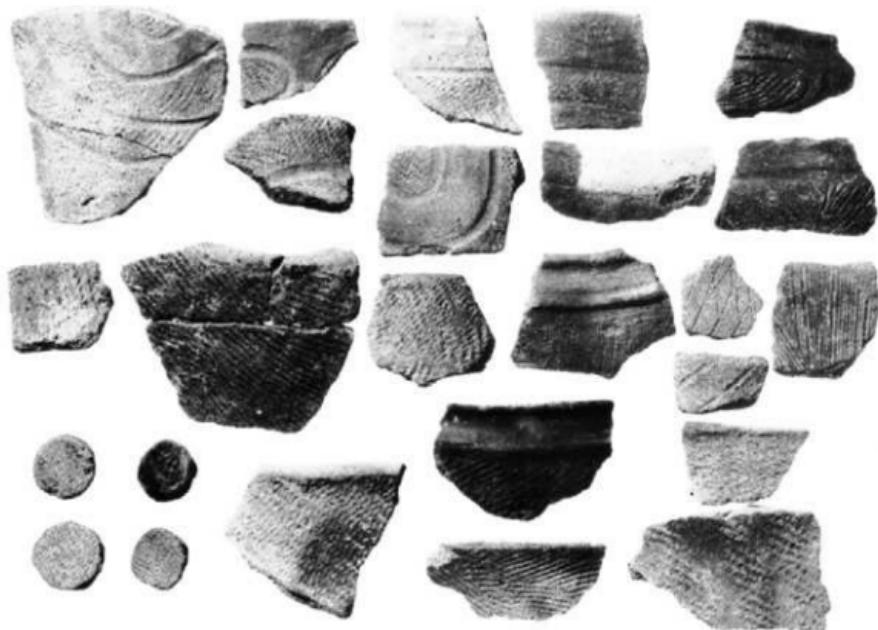


石棒出土状况

图版11 埋藏跡(2)・石棒出土状况



1~3 陶土器



図版12

3~6 陶土器



1 (ST 2+Y)



2 (EL 9b)



3 (EU 16)



4 (EL 6a)

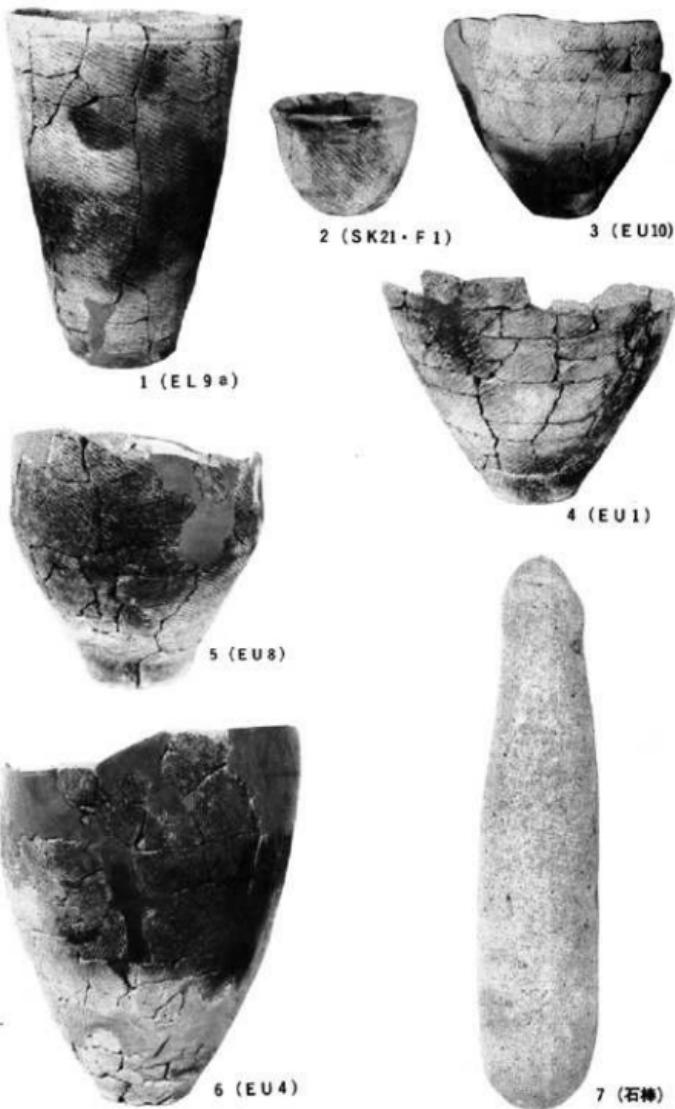


5 (EU 12)



6 (EL 8a)

图版13 完形土器(1)



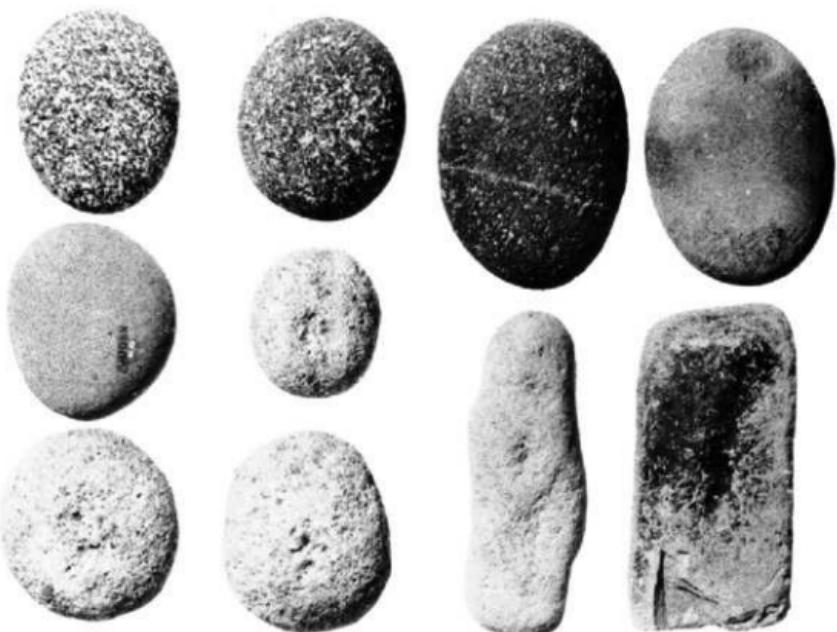
图版14 完形土器(2)・石棒



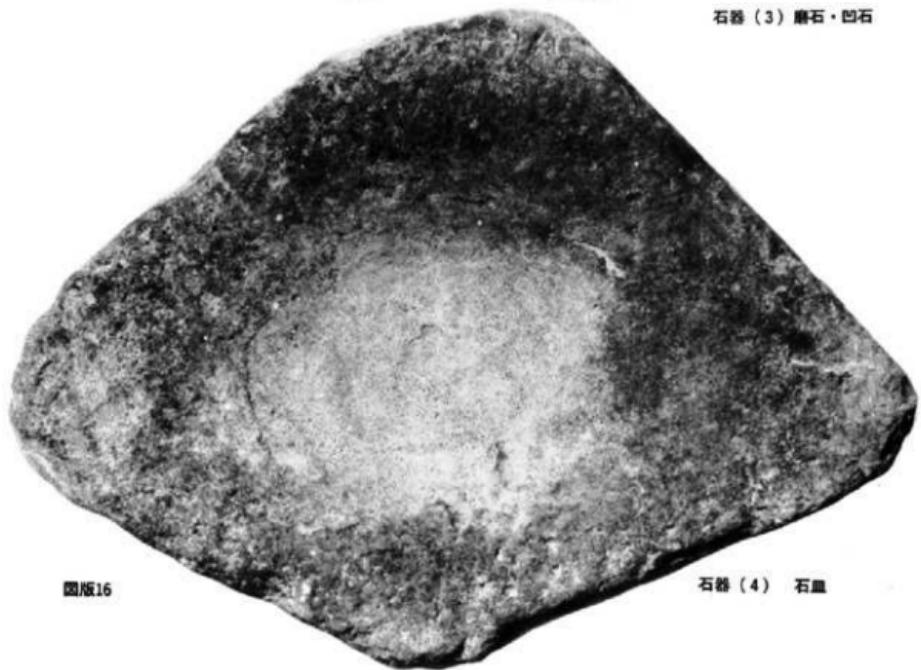
石器（1） 石锥·石鎛·石匙·搔器·雨器· amat状石器·耳飾·垂飾品



石器（2） 垂飾品·磨製石斧



石器（3） 研石・凹石



石器（4） 石皿

山形県埋蔵文化財調査報告書第38集

しも の い せき
下 野 遺 跡

発掘調査報告

昭和 56 年 3 月 25 日 印刷

昭和 56 年 3 月 31 日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 株式会社大風印刷
